

第七條 本則ノ規定ニ依リ商工大臣ニ提出スル書類ハ三通（前條第一項ノ規定ニ依リ添附スル書類ニ在リテハ二通）トシ鑛山又ハ製鍊場ノ所在地ヲ管轄スル鑛山監督局長ヲ經由スベシ

附則

本則ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第六條ノ規定ハ昭和十五年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス
第二條及第三條ノ規定ハ昭和十五年上期分ノ鑛石送付計畫及鑛石受入計畫ニ付テハ之ヲ適用セズ
昭和十五年下期分ノ鑛石送付計畫及鑛石受入計畫ハ第二條及第三條ノ規定ニ拘ラズ昭和十五年十月十日迄ニ之ヲ商工大臣ニ届出ツベシ

鑛業調査規則

昭和四年十一月
商工省令第二十號

第一條 鑛業法第一條ニ規定スル鑛業ヲ爲ス鑛業權者ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ鑛山毎ニ毎年調査票第一號乃至第六號各三通ニ該當事項ヲ調査記入シ翌年二月末日迄ニ鑛山監督局長ニ之ヲ提出スベシ

- 一 鑛業法第二條第一項ニ規定スル鑛物ノ製鍊事業ヲ行フ鑛山ニシテ製鍊事業ニ付三十人以上ノ鑛夫ヲ使用スル設備ヲ有シ又ハ常時三十人以上ノ鑛夫ヲ使用スルモノ
- 二 石炭ノ掘採事業ヲ行フ鑛山ニシテ五百人以上ノ鑛夫ヲ使用スル設備ヲ有シ又ハ常時五百人以上ノ鑛夫ヲ使用スルモノ
- 三 銅鑛、鉛鑛、亜鉛鑛、鐵鑛又ハ硫化鐵鑛ノ掘採事業ヲ行フ鑛山ニシテ二百人以上ノ鑛夫ヲ使

用スル設備ヲ有シ又ハ常時二百人以上ノ鑛夫ヲ使用スルモノ

四 錫鑛、滿俺鑛、石油又ハ硫黃ノ掘採事業ヲ行フ鑛山ニシテ五十人以上ノ鑛夫ヲ使用スル設備ヲ有シ又ハ常時五十人以上ノ鑛夫ヲ使用スルモノ

前項條一號ニ規定スル鑛山ノ鑛業權者ハ前項ノ調査票ノ外調査票第七號三通ニ該當事項ヲ調査記入シ且別記様式第一號ニ準ジテ作製シタル其ノ作業場ノ平面圖三通ヲ添附スベシ

前項ノ作業場ノ平面圖ハ本則ノ規定ニ基キ既ニ提出シタルモノニ變更ナキ限り之ガ添附ヲ省略スルコトヲ得

第二條 鑛山監督局長前條ノ規定ニ依リ提出シタル調査票ヲ受理シタルトキハ其ノ各一通ハ之ヲ受理シタル日ヨリ二年間其ノ應ニ保存シ其ノ他ハ之ヲ取纏メ毎年四月十五日迄ニ商工大臣ニ提出スベシ

鑛山監督局長前條ノ規定ニ依リ添附スベキ平面圖ヲ受理シタルトキハ其ノ一通ハ之ヲ其ノ應ニ保存シ其ノ他ハ之ヲ取纏メ毎年四月十五日迄ニ商工大臣ニ提出スベシ

第三條 鑛山監督局長ハ様式第二號ニ依リ毎年一月一日ヨリ六月末日迄ノ間ニ管轄區域内ニ生ジタル第一條第一項第一號ニ該當スル鑛山ノ開業、休業及廢業ニ付報告書各二通ヲ作製シ八月十五日迄ニ商工大臣ニ之ヲ提出スベシ

第四條 本則ノ規定ニ依リ提出シタル調査票及報告書ハ統計上ノ目的以外ニ之ヲ使用スルコトヲ得ズ但シ人的及物的資源ノ統制運用計畫ノ設定及遂行ニ必要ナル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
前項ノ調査票及報告書ハ統計上ノ目的ニ使用スル場合ト雖鑛山監督局長之ヲ集計發表セントスル

鑛業調査規則

調查票第三號

昭和 年十二月末日現在

探登番號 縣第 號

取投官廳名

鑛山所在地

鑛山名

主要事業

用途	交流モーターノ數		直流ノ數		計	止豫ノ數		用途	交流モーターノ數		直流ノ數		計	止豫ノ數		用途
	作業名	實力別	操業數	馬數		實力別	操業數		馬數	實力別	操業數	馬數		實力別	操業數	
用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途
用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途

昭和 年 月 日提出

鑛業權者ノ住所及氏名又ハ名稱並ニ捺印

調查票第四號

自昭和 年一月一日至昭和 年十二月三十一日

探登番號

縣第 號

鑛山所在地

鑛山名

主要事業

用途	交流モーターノ數		直流ノ數		計	止豫ノ數		用途	交流モーターノ數		直流ノ數		計	止豫ノ數		用途
	作業名	實力別	操業數	馬數		實力別	操業數		馬數	實力別	操業數	馬數		實力別	操業數	
用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途
用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途

昭和 年 月 日提出

鑛業權者ノ住所及氏名又ハ名稱並ニ捺印

第四條 營業ノ讓渡其ノ他ノ事由ニ因リ事業ノ承繼アリタル場合ニ於テ労働者ガ引續キ承繼人ニ使
用セラルルトキハ其ノ労働者ト從前ノ事業主トノ間ニ本法ニ依リテ生ジタル法律關係ハ承繼人ニ
移轉ス

前項ノ場合ニ於テ積立金ノ承繼ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 本法ノ適用ヲ受クル事業ニ使用セラルル労働者ノ中左ニ掲グル者ニハ本法ヲ適用セズ但シ
第一號若ハ第二號ニ該當スル者六月ヲ超エテ引續キ使用セラルルニ至リタルトキ又ハ第三號ニ該
當スル者一年ヲ超エテ引續キ使用セラルルニ至リタルトキハ其ノ時ヨリ其ノ者ニ本法ヲ適用ス

- 一 六月以内ノ期間ヲ定メテ使用セラルル者
- 二 日日雇入レラルル者
- 三 季節的事業ニ使用セラルル者

前項第三號ノ季節的事業ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム

第六條 賃金及標準賃金ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 行政官廳ハ事業主ニ對シ本法ニ依ル積立金ノ積立若ハ運用、退職積立金ノ支拂又ハ退職手
當ノ支給其ノ他本法ノ施行ニ關スル事項ニ付必要ナル検査ヲ爲シ又ハ事業主ヲシテ報告ヲ爲サシ
ムルコトヲ得

第八條 本法ニ依リ事業主ノ積立ツベキ退職手當積立金及準備積立金ノ額ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ
法人タル事業主ニ在リテハ事業年度、個人タル事業主ニ在リテハ曆年ニ於ケル労働者ノ其ノ期間
中ノ賃金ノ百分ノ七ニ相當スル額以下トス

第九條 本法ノ適用ヲ受クル事業ガ事業ノ廢止其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタ
ル場合ニ於テ退職積立金支拂又ハ退職手當支給ノ完了ニ至ル迄ハ之ニ必要ナル限度ニ於テ仍本法
ヲ適用ス

第十條 本法ハ政府ノ事業ニ之ヲ適用セズ
道府縣及市町村其ノ他之ニ準ズベキモノノ事業ニ關シテハ本法ノ適用ニ付勅令ヲ以テ別段ノ規定
ヲ設クルコトヲ得

第二章 退職積立金

第十一條 事業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ労働者ノ賃金ノ中ヨリ其ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ各
労働者ニ代リ其ノ名義ヲ以テ退職積立金トシテ積立ツベシ

災害其ノ他已ムヲ得ザル事由アルトキハ事業主ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ前項ノ規定ニ拘ラズ積立
ヲ爲サズ又ハ減額シテ積立ツルコトヲ得

第十二條 労働者退職（解雇及死亡ヲ含ム以下之ニ同ジ）其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザ
ルニ至リタル場合ニ非ザレバ前條ノ退職積立金ノ支拂ヲ受クルコトヲ得ズ

第十三條 事業主豫メ確實ナル方法及利子ノ定率ヲ定メ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル上労働者ノ同意
ヲ得タルトキハ其ノ労働者ノ退職積立金ヲ運用スルコトヲ得

行政官廳ハ前項ノ許可ヲ爲ス場合ニ於テ必要ト認ムル額ノ國債ヲ供託スベキコトヲ命ズルコトヲ
得

行政官廳必要アリト認ムルトキハ第一項ノ許可ヲ取消シ又ハ前項ノ國債ノ増額ヲ命ズルコトヲ得
退職積立金及退職手當法

労働者ハ事業主ノ運用シタル退職積立金ニ關シ前二項ノ規定ニ依リ供託シタル國債ニ付他ノ債權者ニ先チテ辨濟ヲ受クルノ權利ヲ有ス

前項ノ權利ノ實行ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 前條第一項ノ規定ニ依リ退職積立金ヲ運用シタル場合ニ於テ労働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタルトキハ事業主ハ運用シタル金額ニ前條第一項ノ利子ヲ附シタルモノヲ退職積立金トシテ其ノ労働者ニ支拂フベシ

第十五條 退職積立金ノ支拂ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ差押フルコトヲ得ズ

第三章 退職手当

第十六條 事業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ毎年一回以上一定ノ期間末ニ於ケル労働者ノ其ノ期間中ノ賃金ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ退職手当積立金トシテ遲滞ナク積立ツベシ

災害其ノ他已ムヲ得ザル事由アルトキハ事業主ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ前項ノ規定ニ拘ラズ積立ヲ爲サズ又ハ減額シテ積立ツルコトヲ得

第十七條 事業主ハ前條ノ退職手当積立金ノ外勅令ノ定ムル所ニ依リ毎年一回以上一定ノ期間末ニ於ケル労働者ノ其ノ期間中ノ賃金ノ百分ノ三以内ニ於テ行政官廳ノ認可ヲ受ケタル金額ヲ退職手当積立金トシテ遲滞ナク積立ツベシ但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十八條 前二條ノ退職手当積立金ハ計算期毎ニ其ノ期間中ノ賃金ニ比例シテ労働者別ニ計算ヲ明ニスベシ但シ前條ノ退職手当積立金ニ限り事業主豫メ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ勤務年限、勤務狀態其ノ他ニ依リ異ル率ヲ以テ労働者別ニ計算スルコトヲ得

第十九條 事業主ハ退職手当積立金ヨリ生ジタル利子(分類所得稅ヲ課セラレタルトキハ之ヲ差引キタル金額)及第二十一條第一項ノ規定ニ依リ退職手当積立金ヲ運用シタル場合ニ於テハ同條同項ノ利子ヲ退職手当積立金トシテ遲滞ナク積立ツベシ

前項ノ場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ計算期ニ於テ労働者別ニ計算ヲ明ニスベシ

第二十條 退職手当積立金ノ積立ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ他ノ財産ト分別シテ左ノ方法ニ依リ之ヲ爲スベシ

- 一 郵便貯金
- 二 銀行ヘノ預金
- 三 金錢信託
- 四 登録國債

第二十一條 事業主豫メ確實ナル方法及利子ノ定率ヲ定メ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ退職手当積立金ヲ運用スルコトヲ得

第二十二條 本法ニ依リ退職手当積立金トシテ積立ツル金額ハ所得稅法、法人稅法、營業稅法及臨時利得稅法ノ適用ニ付テハ之ヲ總損金又ハ必要ノ經費ト看做ス

道府縣及市町村其ノ他之ニ準ズベキモノハ本法ニ依リ退職手当積立金トシテ積立ツル金額ヲ標準トシテ課稅スルコトヲ得ズ

第二十三條 退職手当積立金ノ拂戻又ハ償還ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ差押フルコトヲ得ズ
退職積立金及退職手当法

但シ本法ニ依ル退職手當ヲ受クベキ者第二十四條第一項第一號ノ金額又ハ第二十六條第一項ノ特別手當ノ金額ニ付差押フルコトヲ妨ゲズ

第二十四條 勞働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタルトキハ事業主ハ左ノ各號ノ金額ヲ退職手當トシテ支給スベシ但シ命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ事由アル場合ニ於テハ其ノ全部又ハ一部ヲ支給セザルコトヲ得

一 第十八條、第十九條第二項及第二十八條第二項ノ規定ニ依リ其ノ勞働者ノ計算ニ屬スル金額

二 第十六條第一項ノ規定ニ依ル積立ノ最後ノ期間後ノ賃金ノ百分ノ二ニ相當スル金額
前項第一號ノ金額ノ退職手當積立金ノ中ヨリ之ヲ支給シ退職手當積立金ヲ以テ之ヲ支給スルコト能ハザルトキハ事業主ノ他ノ財産ヨリ之ヲ支給スベシ

第一項第二號ノ金額ハ退職手當積立金ノ中ヨリ之ヲ支給スルコトヲ得ズ
勞働者死亡シタル場合ニ於テハ退職手當ハ命令ノ定ムル所ニ依リ遺族又ハ勞働者ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニ之ヲ支給スベシ

第二十五條 前條第一項但書ノ規定ニ依リテ支給スルコトヲ要セザル金額ヲ生ジタルトキハ事業主ハ第二十六條第一項ノ特別手當ニ充ツル爲ノ積立金(特別手當積立金)トシテ之ヲ保留スベシ

第二十六條 事業主事業ノ都合ニ依リ勞働者ヲ解雇シタルトキハ退職手當トシテ第二十四條第一項ノ金額ノ外特別手當積立金ノ存スル限度ニ於テ左ノ各號ノ一ニ達スル迄ノ金額(特別手當)ヲ加算シテ支給スベシ但シ命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ事由アル場合ニ於テハ加算スルコトヲ要セズ

一 勤續一年以上三年未滿ノ者ニ付テハ標準賃金二十日分ニ相當スル金額

二 勤續三年以上ノ者ニ付テハ標準賃金三十五日分ニ相當スル金額

特別手當ヲ受クベキ者二人以上アル場合ニ於テ特別手當積立金ガ前項各號ノ金額ヲ支給スルニ足ラザルトキハ其ノ支給ヲ受クベキ者ノ前項各號ノ金額ニ按分シ特別手當ノ金額ト爲スベシ

第二十四條第二項ノ規定ハ特別手當ノ支給ニ之ヲ準用ス

第二十七條 事業主行政官應ノ許可ヲ受ケ特別手當積立金ノ限度ヲ定メタルトキハ其ノ限度ヲ超ユル金額ハ第十六條及第十七條ノ規定ニ依リ積立ツベキ金額ニ之ヲ充當スベシ
行政官應必要アリト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消シ又ハ變更スルコトヲ得

第二十八條 事業主ハ第十九條第二項ノ計算期ニ於テ退職手當積立金ノ缺損ヲ填補シ餘剰ヲ積立ツベシ
前項ノ規定ニ依リ餘剰ヲ積立ツル場合ニ於テハ命令ノ定ムル所ニ依リ勞働者別ニ計算ヲ明ニスベシ

第二十九條 本法ニ依ル退職手當ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ差押フルコトヲ得ズ

第三十條 事業主退職手當及之ガ支給ニ充ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ヲ定メ行政官應ノ許可ヲ受ケタルトキハ第十六條及第十七條ニ規定スル退職手當積立金ノ積立ヲ爲サザルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケタル規程ノ廢止又ハ變更ハ行政官應ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ
事業主ハ第一項ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケタル場合ニ於テ勞働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適

用ヲ受ケザルニ至リタルトキハ少クトモ勤続一年ニ付標準賃金十二日分ニ相當スル退職手當(事業ノ都合ニ依ル解雇ノ場合ニ於テハ勤続一年以上三年未滿ノ者ニ付テハ標準賃金二十日分、勤続三年以上ノ者ニ付テハ標準賃金三十五日分ニ相當スル金額ヲ加算シタルモノ)ヲ支給スベシ此ノ場合ニ於テハ第二十四條第一項但書及第二十六條第一項但書ノ規定ヲ準用ス

第二十條乃至第二十三條及第二十八條第一項ノ規定ハ第一項ノ準備積立金ニ、第二十四條第四項、第二十九條及第三十一條ノ規定ハ第一項ノ退職手當ニ之ヲ準用ス

行政官應必要アリト認ムルトキハ第一項ノ許可ヲ取消シ又ハ準備積立金ノ増額ヲ命ズルコトヲ得

第四章 退職金審査會

第三十一條 退職積立金ノ支拂又ハ退職手當ノ支給ニ關スル事項ニ付民事訴訟ヲ提起スルニハ退職金審査會ノ審査ヲ經ルコトヲ要ス

前項ノ審査ノ請求ハ時効ノ中斷ニ關シテハ裁判上ノ請求ト看做ス

第三十二條 退職金審査會ノ組織及審査ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 罰 則

第三十三條 事業主第二十一條第一項(第三十條第四項又ハ第四十二條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)ノ許可ヲ受ケズシテ退職手當積立金又ハ準備積立金ヲ處分シタルトキハ一年以下ノ禁錮又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

事業主法人ナル場合ニ於テ前項ノ許可ヲ受ケザルニ拘ラズ其ノ理事、取締役其ノ他法人ノ業務ヲ執行スル役員退職手當積立金又ハ準備積立金ヲ處分シタルトキ其ノ者ニ付亦前項ニ同ジ

第三十四條 事業主左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

- 一 第三條第二項、第十一條第一項、第十四條、第十六條第一項、第十七條、第十八條、第十九條、第二十條(第三十條第四項又ハ第四十二條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)、第二十四條第一項、第四項(第三十條第四項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)、第二十五條、第二十六條第一項、第二十七條第一項、第二十八條(第三十條第四項又ハ第四十二條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)又ハ第四十一條第二項ノ規定ニ違反シタルトキ
- 二 第十三條第二項第三項(第二十一條第二項、第三十條第四項又ハ第四十二條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)、第十七條又ハ第三十條第五項ノ規定ニ依ル命令ニ從ハザルトキ
- 三 第三條第一項、第三十條第一項又ハ第四十二條ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケタル準備積立金ノ積立ヲ爲サザルトキ

四 第三十條第三項ノ規定ニ依リ支給スベキ退職手當トシテ勤続一年ニ付標準賃金十二日分以内ニ相當スル金額(事業ノ都合ニ依ル解雇ノ場合ニ於テハ勤続一年以上三年未滿ノ者ニ付テハ標準賃金二十日分以内、勤続三年以上ノ者ニ付テハ標準賃金三十五日分以内ニ相當スル金額ヲ加算シタルモノ)ヲ支給セザルトキ

第三十五條 第七條ノ規定ニ依ル検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シ又ハ報告ヲ爲サズ若ハ虚偽ノ報告ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十六條 事業主ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出退職積立金及退職手當法

デザルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ズ

第三十七條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ事業主ニ適用スベキ罰則ハ其ノ者ガ法人ナルトキハ理事、取締役其ノ他法人ノ業務ヲ執行スル役員ニ、未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

附則

第三十八條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（昭和十一年勅令第四百十三號ヲ以テ同十二年一月一日ヨリ施行）

第三十九條 第十六條又ハ第十七條ノ規定ニ依ル本法適用後ノ最初ノ積立金ニ付テハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第四十條 勞働者第十六條ノ規定ニ依ル本法適用後ノ積立ノ最初ノ期間中ニ退職其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル場合ニ於テハ第二十四條第一項第二號ノ金額ハ本法適用後ノ賃金ノ百分ノ二ニ相當スル金額トス

第四十一條 事業主及勞働者ノ出捐ニ係ル組合ガ本法施行ノ際現ニ退職手當ニ關スル規程ヲ有スル場合ニ於テ事業主行政官應ノ許可ヲ受ケタルトキハ第十一條ニ規定スル退職積立金並ニ第十六條及第十七條ニ規定スル退職手當積立金ノ積立ヲ爲サザルコトヲ得

前項ノ組合ガ勞働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ本法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル場合ニ支給スベキ金額ヲ支給セザルトキハ事業主ハ組合ノ支給セザル金額ニ相當スル金額ヲ勞働者ニ支給スベシ

行政官應必要アリト認ムルトキハ第一項ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第四十二條 事業主本法施行ノ際現ニ使用スル勞働者ノ本法施行前ノ勤務ニ對スル退職手當及之ガ支給ニ充ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ヲ定メ行政官應ノ許可ヲ受ケタルトキハ第二十條乃至第二十三條及第二十八條第一項ノ規定ハ準備積立金ニ、第二十九條及第三十一條ノ規定ハ退職手當ニ之ヲ準用ス

第四十三條 本法ノ適用ヲ受クル事業ニ於ケル本法適用前ノ退職手當規程ハ本法ノ適用ニ依リ應止又ハ變更セララルコトナシ

但シ本法適用後ノ勤務ニ對シ本法ニ依ル退職手當ヲ支給スル場合ニ於テハ從前ノ規程ニ依リ支給スベキ退職手當ハ其ノ差額ヲ支給スルヲ以テ足ル

第四十四條 國稅徵收法第十六條ニ左ノ一項ヲ加フ

退職積立金及退職手當法ニ依ル退職手當積立金及準備積立金ニ付亦前項ニ同ジ

第四十五條 郵便貯金法第四條ニ左ノ一號ヲ加フ

五 退職積立金及退職手當法ニ依ル積立金ノ預入金

退職積立金及退職手当法施行令

昭和十一年十一月
勅令第四百十四號

改正 昭和十三年第二〇號、一五年第四五四號
一六年第一七四號

第一章 總 則

第一條

退職積立金及退職手当法ノ賃金ノ範圍ハ常時又ハ定期ニ受クル給與其ノ他ノ利益トス但シ左ニ掲グルモノヲ除ク

- 一 三月ヲ超ユル期間毎ニ支給スル賞與又ハ手当
- 二 通勤手当
- 三 住居ニ關スル利益又ハ住宅料ニシテ賃金ノ額ノ決定ニ影響ナキモノ
- 四 其ノ他厚生大臣ノ指定スルモノ

賃金ノ全部又ハ一部ガ金錢以外ノ給與其ノ他ノ利益ナル場合ニ於テハ其ノ價額ハ健康保險法施行令第二條第一項及第二項ノ規定ニ依リ定ムル標準價格ニ依リ之ヲ算定ス但シ同條第三項ノ規定ニ依リ別段ノ定ヲ爲シタル健康保險組合ノ被保險者タル労働者ニ付テハ其ノ定ニ依リ之ヲ算定ス

第二條

退職積立金及退職手当法又ハ同法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ一定ノ期間中ノ賃金ノ計算ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ期間中ニ支拂ハルベキ賃金ニ依リ之ヲ爲スモノトス

事業主行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ労働者ノ各一月ノ賃金ハ前項ノ規定ニ拘ラズ健康保險法施行令第三條乃至第五條ノ規定ニ依リ被保險者ノ標準報酬日額ヲ定ムル方法ニ依リ當該労働者ニ

付算定シタル金額ノ三十倍ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ一月中當該労働者ニ支拂ハルベキ賃金ナキトキハ其ノ一月ニ於ケル其ノ者ノ賃金ハ之ヲナキモノト爲スコトヲ得

行政官廳必要アリト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第三條

退職積立金及退職手当法ノ標準賃金ハ健康保險法施行令第三條乃至第五條ノ規定ニ依リ被保險者ノ標準報酬日額ヲ定ムル方法ニ依リ算定シタル金額トス

前項ノ規定ニ依ル金額ガ負傷、疾病、老衰其ノ他ノ事由ニ因リ従前ニ比シ著シク低額ナルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ従前ノ標準報酬日額其ノ他ヲ斟酌シテ事業主適當ナル金額ヲ定ムベシ

第四條

退職積立金及退職手当法第八條ノ賃金ハ左ノ各號ノ金額ノ合算額トス

- 一 退職積立金及退職手当法第八條ノ期間ノ末日ニ於ケル労働者ノ其ノ期間中ノ賃金
- 二 退職積立金及退職手当法第八條ノ期間中ニ退職（解雇及死亡ヲ含ム以下之ニ同ジ）其ノ他ノ事由ニ因リ同法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル労働者ノ賃金ニシテ退職手当積立金及準備積立金ノ積立ノ基準ト爲シタル金額

第五條

道府縣又ハ道府縣ト労働者トノ出捐ニ係ル組合ガ退職積立金及退職手当法ニ準ズル退職積立金又ハ退職手当ニ關スル規程ヲ有スル場合ニ於テハ道府縣ハ同法第十一條ニ規定スル退職積立金若ハ同法第十六條及第十七條ニ規定スル退職手当積立金ノ積立ヲ爲サズ又ハ同法第十一條若ハ第十六條及第十七條ニ規定スル率ト異ナル率ノ積立ヲ爲スコトヲ得

市町村其ノ他之ニ準ズベキモノ又ハ市町村其ノ他之ニ準ズベキモノト労働者トノ出捐ニ係ル組合ガ退職積立金及退職手当法ニ準ズル退職積立金又ハ退職手当ニ關スル規程ヲ有スル場合ニ於テ市

退職積立金及退職手当法施行令

町村其ノ他之ニ準ズベキモノ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキ亦前項ニ同ジ
行政官廳必要アリト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第六條 事業主ハ退職積立金、退職手當積立金及準備積立金並ニ退職手當ニ關シ計算ヲ爲ス場合ニ
於テ一錢未滿ノ端數アルトキハ之ヲ切捨ツルモノトス

第七條 本令中行政官廳トアルハ工場法ノ適用ヲ受クル工場ニ在リテハ地方長官（東京府ニ在リテ
ハ警視總監以下之ニ同ジ）、鑛業法ノ適用ヲ受クル事業ニ在リテハ鑛山監督局長トス

第二章 退職積立金

第八條 退職積立金トシテ積立ツベキ金額ノ計算ハ豫メ事業主ノ定メタル一月以内ノ一定ノ期間中
ノ賃金ニ依リ之ヲ爲スモノトス

事業主ハ退職積立金トシテ積立ツベキ金額ヲ前項ノ期間毎ニ其ノ期間中ノ賃金ヨリ控除スベシ但
シ其ノ期間中ノ賃金ヨリ控除スルコト能ハザルトキハ其ノ次ノ期間中ノ賃金ヨリ控除スルコトヲ
得

第九條 退職積立金ノ積立ハ前條第二項ノ規定ニ依ル控除ノ都度遲滞ナク之ヲ爲スベシ但シ行政官
廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ一定ノ時期ニ取纏メ積立ヲ爲スコトヲ得

行政官廳必要アリト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消スコトヲ得
第十條 退職積立金ノ積立ハ事業主行政官廳ノ許可ヲ受ケ労働者ノ他ノ財産ト分別シテ郵便貯金、
銀行ヘノ預金、金銭信託、登録國債其ノ他確實ナル方法ニ依リ之ヲ爲スベシ
行政官廳必要アリト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消シ又ハ積立ノ方法ヲ指定スルコトヲ得

郵便貯金、銀行ヘノ預金又ハ金銭信託ノ方法ニ依リ退職積立金ノ積立ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ支
拂ニ付事業主ノ證明ヲ必要トスル方法ニ依リ之ヲ爲シ通帳又ハ證書ハ事業主之ヲ保管スベシ
登録國債ノ方法ニ依リ退職積立金ノ積立ヲ爲ス場合ニ於テハ登録ノ變更又ハ除却等其ノ登録國債
ニ關スル請求ハ事業主之ヲ爲シ其ノ登録國債ノ元利金ノ支拂又ハ登録除却ノ場合ニ於ケル證券ノ
引渡ハ日本銀行之ヲ事業主ニ爲スベシ

第十一條 退職積立金ノ積立ハ郵便貯金、銀行ヘノ預金又ハ金銭信託ノ方法ニ依ル場合ニ在リテハ
通帳又ハ證書ニ退職積立金タルコトノ表示ヲ爲スコトヲ以テ、登録國債ノ方法ニ依ル場合ニ在リ
テハ甲種國債登録簿ニ退職積立金タル旨ノ記載ヲ爲スコトヲ以テ之ヲ爲ス

郵便貯金、銀行ヘノ預金又ハ金銭信託ノ方法ニ依ル退職積立金ノ積立ニ付テハ郵便官署、銀行又
ハ信託會社其ノ受入又ハ引受ヲ爲シタルトキハ事業主ノ請求ニ依リ通帳又ハ證書ニ退職積立金タ
ルコトノ表示ヲ爲シ尙貯金原簿又ハ之ニ準ズベキ帳簿ニ退職積立金タル旨ノ記載ヲ爲スベシ

登録國債ノ方法ニ依ル退職積立金ノ積立ニ付テハ日本銀行ハ事業主ノ請求ニ依リ甲種國債登録簿
ニ退職積立金タル旨ノ記載ヲ爲スベシ

第十二條 労働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ退職積立金及退職手當法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル場
合ニ於テハ事業主ハ労働者ガ退職積立金ノ支拂ヲ受クルニ必要ナル事業主ノ爲スベキ手續ヲ遲滞
ナク完了スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ事業主ハ退職積立金ニ關スル表示又ハ記載ノ抹消ヲ請求スベシ
第十三條 事業主ハ労働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ退職積立金及退職手當法ノ適用ヲ受ケザルニ至

退職積立金及退職手當法施行令

リタル場合ニ於テ其ノ労働者ノ賃金ヨリ控除シタル金額ニシテ積立ヲ爲サザルモノアルトキハ之ヲ支拂フベシ

第三章 退職手當

第十四條 事業主ハ退職積立金及退職手當法第十六條ノ規定ニ依ル退職手當積立金ノ積立ニ關スル計算ノ期間ヲ定メ豫メ行政官廳ニ届出ヅベシ

行政官廳必要アリト認ムルトキハ前項ノ計算ノ期間ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

第十五條 退職積立金及退職手當法第十六條及第十七條ノ規定ニ依リ積立ツベキ退職手當積立金ノ計算ハ其ノ計算ノ期間中ニ於ケル退職積立金ノ計算ノ期間毎ニ労働者別ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十六條 退職積立金及退職手當法第十七條ノ規定ニ依ル退職手當積立金ノ積立ニ關スル計算ノ期間ハ法人タル事業主ニ在リテハ事業年度、個人タル事業主ニ在リテハ曆年トス

第十七條 退職積立金及退職手當法第十七條ノ規定ニ依リ積立ツベキ退職手當積立金ノ額ハ左ノ各號ヲ標準トスルモノトス

- 一 法人タル事業主ニ在リテハ事業年度ニ於ケル利益配當金額ヲ拂込株金額又ハ出資金額ニ依リ除シタル割合ガ年百分ノ五ヲ超エ年百分ノ七・五以内ナルトキハ賃金ノ百分ノ一、年百分ノ七・五ヲ超エ年百分ノ十以内ナルトキハ賃金ノ百分ノ二、年百分ノ十ヲ超ユルトキハ賃金ノ百分ノ三ニ相當スル金額但シ利益配當金額ガ拂込株金額又ハ出資金額ノ年百分ノ五ノ割合ヲ超ユル金額ノ十分ノ一ヲ限度トスルコトヲ得
- 二 個人タル事業主ニ在リテハ曆年ニ於ケル事業ノ純益金額ガ一萬圓ヲ超エ二萬圓以内ナルトキ

ハ賃金ノ百分ノ一、二萬圓ヲ超エ三萬圓以内ナルトキハ賃金ノ百分ノ二、三萬圓ヲ超ユルトキハ賃金ノ百分ノ三ニ相當スル金額但シ純益金額ノ百分ノ六十ガ六千圓ヲ超ユル金額ノ十分ノ一ヲ限度トスルコトヲ得

前項ノ事業年度ハ當該事業年度又ハ直前ノ事業年度、曆年ハ當該曆年又ハ直前ノ曆年トシ事業主ノ選擇スル所ニ依ル但シ選擇シタル事業年度又ハ曆年ハ労働者ノ不利益ニ之ヲ變更スルコトヲ得ズ

行政官廳事業主ノ爲シタル利益配當金額、純益金額又ハ積立ノ金額ノ算定不當ナリト認ムルトキハ積立ノ金額ヲ更正シテ認可スルコトヲ得

詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ認可ヲ受ケタル者ニ對シテハ行政官廳ハ其ノ認可シタル金額ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

第十八條 第十一條ノ規定ハ退職手當積立金及準備積立金ニ之ヲ準用ス

第十九條 郵便貯金、銀行ヘノ預金、金錢信託又ハ登録國債ノ方法ニ依リ積立ヲ爲シタル退職手當積立金又ハ準備積立金ガ退職手當積立金又ハ準備積立金タラザルニ至リタルトキハ事業主ハ退職手當積立金又ハ準備積立金ニ關スル表示又ハ記載ノ抹消ヲ請求スベシ

第二十條 法人タル事業主ニ在リテハ事業年度、個人タル事業主ニ在リテハ曆年終了後其ノ期間中ニ於ケル賃金、退職手當積立金及準備積立金ノ積立額並ニ賃金ニ對スル積立額ノ比率ヲ記シタル計算書ヲ所得税、法人税、營業税又ハ臨時利得税ニ關スル申告ノ際稅務署ニ提出スベシ

第四條ノ規定ハ前項ノ賃金ニ之ヲ準用ス

退職積立金及退職手當法施行令

第二十一條 退職積立金及退職手當法第二十四條第四項又ハ第三十條第四項ノ規定ニ依リ退職手當

ヲ受クベキ者ハ勞働者ノ配偶者トス

配偶者ナキ場合ニ於テ退職手當ヲ受クベキ者ハ勞働者死亡當時之ト同一ノ家ニ在リタル勞働者ノ直系卑屬又ハ直系尊屬トシ其ノ順位ハ親等ノ近キモノヲ先ニシ卑屬ト尊屬ト親等相同ジキトキハ卑屬ヲ先ニス

第二十二條 前條第二項ニ定メタル同順位者ノ間ニ在リテハ其ノ順位ハ左ノ規定ニ依ル

一 勞働者ノ家督相續人又ハ戸主ハ之ヲ他ノ者ヨリ先ニス

二 男ハ之ヲ女ヨリ先ニス

三 直系卑屬ニ付テハ男又ハ女ノ間ニ在リテハ嫡出子ヲ先ニシ嫡出子、庶子及私生子ノ間ニ在リテハ嫡出子及庶子ハ女ト雖モ之ヲ私生子ヨリ先ニス

四 前二號ニ掲グル事項ニ付相同ジキ者ノ間ニ在リテハ年長者ヲ先ニス

第二十三條 第二十一條ノ規定ニ該當スル者ナキ場合ニ於テハ左ニ掲グル者ノ中一人ニ退職手當ヲ支給スベシ但シ勞働者ノ遺言又ハ事業主ニ對シテ爲シタル豫告ニ依リ左ニ掲グル者ノ中一人ヲ特ニ指定シタルトキハ之ニ從フベシ

一 勞働者ノ家督相續人又ハ戸主

二 勞働者ノ兄弟姉妹ニシテ勞働者ノ死亡當時之ト同一ノ家ニ在リタル者

三 勞働者ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者

第四章 退職金審査會

第二十四條 退職金審査會ハ厚生大臣ノ監督ニ屬シ退職積立金ノ支拂又ハ退職手當ノ支給ニ關スル事項ヲ審査ス

第二十五條 退職金審査會ノ管轄區域ハ道府縣ノ區域トシ其ノ名稱及位置ハ厚生大臣之ヲ定ム

第二十六條 退職金審査會ハ會長一人及委員九人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第二十七條 會長ハ地方長官ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ關係各應高等官又ハ學識經驗アル者ノ中ヨリ厚生大臣之ヲ命ズ

學識經驗アル者ノ中ヨリ命ゼラレタル委員ノ任期ハ三年トス但シ特別ノ事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ解任スルコトヲ妨ゲズ

第二十八條 會長ハ會務ヲ總理シ會議ノ議長ト爲ル

會長事故アルトキハ地方長官ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第二十九條 退職金審査會ニ幹事及書記ヲ置ク關係各應ノ官吏中ヨリ地方長官之ヲ命ズ
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三十條 審査ハ勞働者退職其ノ他ノ事由ニ因リ退職積立金及退職手當法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル際其ノ使用セラレタル事業ノ所在地ヲ管轄スル退職金審査會ニ於テ之ヲ爲ス
前項ノ事業ノ所在地數府縣ニ互ル場合ニ於テハ之ヲ管轄スル退職金審査會ハ厚生大臣之ヲ指定ス

第三十一條 審査ノ請求ハ請求ノ趣旨ヲ明ニシテ之ヲ爲スベシ
前項ノ請求ハ文書又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

退職積立金及退職手當法施行令

第三十二條 審査ハ委員半數以上出席スルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ但シ同一ノ事件ニ付招集
再回ニ及ブ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第三十三條 審査ハ出席委員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第三十四條 審査ハ之ヲ公開セズ

第三十五條 工場監督官、鑛務監督官其ノ他ノ關係官吏ハ退職金審査會ノ請求ニ依リ又ハ其ノ承認
ヲ受ケ會議ニ出席シ意見ヲ述ブルコトヲ得

第三十六條 審査請求人又ハ關係人ハ退職金審査會ノ請求ニ依リ又ハ其ノ承認ヲ受ケ事件ニ關スル
説明ヲ爲スコトヲ得

第三十七條 退職金審査會審査ノ請求ヲ受ケタル場合ニ於テ其ノ事件ガ管轄違ヒナルトキハ會長ハ
之ヲ所轄退職金審査會ニ移送スベシ

第三十八條 審査ノ決定ハ理由ヲ附シ文書ヲ以テ之ヲ爲スベシ

第三十九條 退職金審査會ハ前條ノ決定書ノ謄本ヲ作成シ遲滞ナク之ヲ審査請求人ニ交付スベシ
審査請求人ニ對シ決定書ノ謄本ヲ交付スルコト能ハザルトキハ退職金審査會ハ其ノ決定書ノ謄本
ヲ揭示板ニ揭示スベシ

第四十條 審査請求人審査ノ決定前ニ死亡シタルトキハ其ノ承繼人ニ於テ審査請求ノ手續ヲ受繼グ
モノトス

附則

本令ハ退職積立金及退職手當法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和十二年一月一日ヨリ施行）

退職積立金及退職手當法適用後初テ第八條第二項ノ規定ニ依リ賃金ヨリ控除スベキ額ハ同法適用後
ノ勤務ニ對スル賃金ニ依リ之ヲ計算スルコトヲ得
退職積立金及退職手當法適用後初テ同法第十六條及第十七條ノ規定ニ依リ積立ツベキ退職手當積立
金ノ額ハ同法適用後ノ勤務ニ對スル賃金ニ依リ之ヲ計算スルコトヲ得

退職積立金及退職手當法施行規則

昭和十一年十一月
內務省令第四十六號

第一條 退職積立金及退職手當法（以下法ト稱ス）第一條ノ規定ニ依リ法ノ適用ヲ受クルニ至リタ
ル事業ノ事業主ハ左ニ掲グル事項ヲ十日以内ニ地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監以下之ニ同
ジ）ニ届出ツベシ第一號又ハ第二號ノ事項ニ變更アリタルトキハ其ノ事項ニ付亦同ジ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所（法人タル事業主ニ在リテハ其ノ名稱、主タル事務所ノ所在地及代表者
ノ氏名以下之ニ同ジ）
- 三 常時使用勞働者數
- 四 法ノ適用ヲ受クルニ至リタル年月日

第二條 事業主其ノ事業ヲ廢止シタルトキハ直ニ其ノ旨ヲ地方長官ニ届出ツベシ

第三條 法第二條ノ届出ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ
一 事業ノ名稱、種類及所在地

退職積立金及退職手當法施行規則

三 常時使用労働者數

四 法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル事由

五 退職積立金及退職手當積立金ノ現在高並ニ退職手當及之ガ支給ニ充ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ヲ有スルモノニ在リテハ準備積立金ノ現在高及支給スベキ退職手當ノ金額

第四條 法第三條第一項ノ許可ノ申請ハ退職積立金、退職手當積立金又ハ退職手當及之ガ支給ニ充

ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ノ外左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

一 事業ノ名稱、種類及所在地

二 事業主ノ氏名及住所

三 常時使用労働者數

法第三條第二項ノ許可ノ申請ハ前項各號ノ事項ノ外左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

シ

一 規定ヲ廢止又ハ變更セントスル理由

二 規程ヲ廢止セントスル場合ハ其ノ廢止ニ關スル規程及前條第五號ノ事項、規程ヲ變更セントスル場合ハ其ノ規程

第五條 營業ノ讓渡其ノ他ノ事由ニ因リ事業ノ承繼アリタル場合ニ於テ労働者ノ全部ガ引續キ承繼

人ニ使用セラルルトキハ積立金ノ全部ニ付、労働者ノ一部ガ引續キ承繼人ニ使用セラルルトキハ

左ノ各號ノ積立金ニ付從前ノ事業主及承繼人ハ名義ノ變更其ノ他必要ナル手續ヲ爲スベシ

一 引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者ニ屬スル退職積立金

二 退職手當積立金中労働者別ニ計算ヲ明ニシタルモノニ付テハ引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者ノ計算ニ屬スル金額

働者ノ計算ニ屬スル金額

三 退職手當積立金中特別手當積立金トシテ保留シタルモノニ付テハ各労働者ノ標準賃金ニ之ヲ按分シ引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者ニ付得タル金額

按分シ引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者ニ付得タル金額

四 準備積立金ニ付テハ各労働者ノ標準賃金ニ勤続年數ヲ乘ジタル額ニ之ヲ按分シ引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者ニ付得タル金額

ニ使用セラルル労働者ニ付得タル金額

前項ノ場合ニ於テ労働者ノ一部ガ引續キ承繼人ニ使用セラルルトキハ法第十九條第二項又ハ法第二十八條ノ規定ニ依ル計算又ハ積立ハ事業ノ承繼アリタル日ヲ以テ計算又ハ積立ノ期日到来シタルモノト看做シ之ヲ爲スベシ法第三十條第四項又ハ法第四十二條ノ規定ニ依リ法第二十八條第一項ノ規定ヲ準用スル場合亦同ジ

第六條 承繼人ハ從前ノ事業主トノ連署ヲ以テ左ニ掲グル事項ヲ事業ノ承繼アリタル日ヨリ十日以

内ニ地方長官ニ届出ツベシ連署スルコト能ハザルトキハ其ノ旨ヲ附記スベシ

一 事業ノ名稱、種類及所在地

二 事業主(事業ノ承繼人及從前ノ事業主)ノ氏名及住所

三 事業ノ承繼ノ事由及全部承繼又ハ一部承繼ノ別

四 引續キ承繼人ニ使用セラルル労働者數

五 承繼シタル積立金

退職積立金及退職手當法施行規則

六二五

第七條 退職積立金及退職手當法施行令（以下令ト稱ス）第二條第二項ノ許可申請書ニハ左ニ掲グル事項ヲ記載スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所
- 三 使用労働者現在數
- 四 標準報酬日額ノ平均額
- 六 報酬日額四圓ヲ超ユル労働者數

第八條 事業主ハ毎年二月十五日迄ニ前年ニ於ケル退職積立金、退職手當積立金及準備積立金ノ積立並ニ退職積立金ノ支拂及退職手當又ハ之ニ代ルベキモノノ支給ノ狀況ヲ地方長官ニ届出ツベシ

第九條 法ノ適用ヲ受クル事業ガ事業ノ廢止其ノ他ノ事由ニ因リ法ノ適用ヲ受ケザルニ至リタル場合ハ事業主ハ遲滞ナク退職積立金ノ支拂及退職手當ノ支給ヲ完了シタル上其ノ顛末ヲ地方長官ニ届出ツベシ

第十條 令第五條第二項ノ許可申請書ニハ左ニ掲グル事項ヲ記載スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業經營ノ主體
- 三 常時使用労働者數
- 四 退職積立金又ハ退職手當ニ關スル規程
- 五 組合ノ組織（組合規約又ハ之ニ準ズベキモノヲ添附スルコト）

- 六 退職積立金ニ代ルベキ事項
- 七 退職手當ノ支給ニ依ルベキ事項

令第五條第二項ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケタルモノハ前項第四號乃至第七號ノ事項ニ變更アリタルトキハ其ノ事項ヲ遲滞ナク地方長官ニ届出ツベシ

第十一條 事業主ハ退職積立金臺帳ヲ調製シ労働者別ニ左ニ掲グル事項及其ノ年月日ヲ記載スベシ

- 一 退職積立金トシテ控除シタル金額
- 二 退職積立金トシテ積立テタル金額
- 三 退職積立金ヨリ生ジタル利子
- 四 積立方法別金額
- 五 退職積立金ヲ運用シタル金額及退職積立金ヘ積戻シタル金額

第十二條 法第十一條第二項ノ許可ノ申請ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所
- 三 災害其ノ他已ムヲ得ザル事由ノ具體的事項及積立ノ程度

第十三條 法第十三條第一項ノ許可ノ申請ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所
- 三 運用セントスル金額及期間

退職積立金及退職手當法施行規則

四 支拂又ハ積戻ノ確保ニ關スル方法
五 利率

第十四條 法第十三條第二項又ハ第三項ノ規定ニ依リ供託ヲ命ゼラレタル事業主ハ事業ノ所在地ニ於テ供託ヲ爲スベシ

前項ノ事業主供託ヲ爲シタルトキハ供託國債受人ノ記載アル供託書ノ寫ヲ添附シ遲滞ナク其ノ旨ヲ地方長官ニ届出ヅベシ

地方長官法第十三條第四項ノ權利ノ實行ニ關シ必要アリト認ムルトキハ供託國債受人ノ記載アル供託書又ハ退職積立金ニ關スル帳簿ノ提出ヲ命ズルコトヲ得

第十五條

事業主ハ退職手當積立金臺帳ヲ調製シ左ニ掲グル事項及其ノ年月日ヲ記載スベシ

- 一 法第十六條ノ規定ニ依リ退職手當積立金トシテ積立テタル金額
- 二 法第十七條ノ規定ニ依リ退職手當積立金トシテ積立テタル金額
- 三 退職手當積立金ヨリ生ジタル利子及餘剰ヲ積立テタル金額
- 四 退職手當積立金中ヨリ退職手當トシテ支給シタル金額
- 五 積立方法別金額
- 六 退職手當積立金ヲ運用シタル金額及退職手當積立金へ積戻シタル金額

第十六條 事業主ハ退職手當積立金労働者別明細簿ヲ調製シ労働者毎ニ法第十六條、法第十七條及法第十九條ノ積立金（法第二十八條ノ積立金ヲ含ム）別ニ積立テタル金額及其ノ年月日ヲ記載スベシ

第十七條 事業主ハ特別手當積立金明細簿ヲ調製シ特別手當積立金トシテ保留シタル金額、特別手當トシテ支給シタル金額及退職積立金ニ充當シタル金額並ニ其ノ年月日ヲ記載スベシ

第十八條 第十二條ノ規定ハ法第十六條第二項ノ許可ノ申請ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 法第十七條ノ認可ノ申請ハ法人タル事業主ニ在リテハ當該事業年度、個人タル事業主ニ在リテハ當該曆年終了後一月以内ニ地方長官ニ之ヲ爲スベシ但シ已ムヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ認可ノ申請ハ當該事業年度又ハ曆年終了前ニ豫メ之ヲ爲スコトヲ得

第二十條 前條第一項ノ認可申請書ニハ左ニ掲グル事項ヲ記載スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所
- 三 期間末ニ於ケル労働者數及其ノ期間中ノ賃金ノ額
- 四 積立テントスル退職手當積立金ノ金額及前號ノ賃金ノ額ニ對スル割合
- 五 法人タル事業主ニ在リテハ事業年度ニ於ケル拂込株金額又ハ出資金額、利益配當金額及利益配當金額ヲ拂込株金額又ハ出資金額ニ依リ除シタル年割合、個人タル事業主ニ在リテハ曆年ニ於ケル事業ノ純益金額

前條第二項ノ認可申請書ニハ前項第一號及第二號ノ事項並ニ退職手當積立金ノ額ヲ定ムル標準ヲ記載スベシ

第二十一條 事業主第十九條第二項ノ規定ニ依リ法第十七條ノ認可ヲ受ケタル場合ハ法人タル事業退職積立金及退職手當法施行規則

主ニ在リテハ當該事業年度、個人タル事業主ニ在リテハ當該曆年終了後遲滞ナク前條第一項各號ノ事項ヲ地方長官ニ届出ツベシ

第二十二條 法第十七條但書ノ許可ノ申請ハ第二十條第一項第一號乃至第三號及第五號ノ事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

第二十三條 法第十八條但書ノ許可ノ申請ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
- 二 事業主ノ氏名及住所
- 三 労働者別計算ノ標準

第二十四條 事業主ハ豫メ法第十九條第二項ノ一定ノ計算期ヲ定メ地方長官ニ届出ツベシ

前項ノ計算期ハ毎年一回以上タルコトヲ要ス

法第十九條第一項ノ退職手當積立金ニシテ労働者別ニ計算ヲ明ニセザル金額ハ當該計算期ニ於ケル労働者ノ直前ノ計算期ニ於テ労働者別ニ計算ノ明ナル退職手當積立金ノ額及直前ノ計算期ニ於ケル特別手當積立金ノ額ニ之ヲ按分シテ計算ヲ明ニスベシ

第二十五條 第十三條ノ規定ハ法第二十一條第一項ノ許可ノ申請ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十六條 第十四條ノ規定ハ法第二十一條第二項、法第三十條第四項又ハ法第四十二條ノ規定ニ依リ法第十三條第二項乃至第五項ノ規定ヲ準用スル場合ニ之ヲ準用ス

第二十七條 労働者左ノ各號ノ一ニ該當スル事由ニ因リ解雇セラレタルトキハ法第二十四條第一項ノ退職手當ハ之ヲ支給セザルコトヲ得

一 重要ナル經歷ヲ詐リ其ノ他詐術ヲ用ヒテ雇傭セラレタルコト

二 營業ノ秘密ヲ漏洩シ又ハ漏洩セントシタルコト明ナルコト

三 故意ニ事業ノ設備又ハ器具ヲ破壊シタルコト

四 正當ノ理由ナクシテ無斷缺勤引續キ十四日以上ニ及ビタルコト

五 其ノ他前各號ニ準ズル程度ノ背信行爲アリタルコト

第二十八條 労働者勤続三年未滿ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル事由ニ因リ解雇セラレタルトキハ法第二十四條第一項ノ退職手當ハ之ヲ支給セザルコトヲ得

一 事業ノ風紀ヲ甚シク紊シタルコト

二 素行著シク不良ナルコト

三 戒告數回ニ及ブモ仍出勤常ナラザルコト

四 戒告數回ニ及ブモ仍怠慢ニシテ勞務ニ不熱心又ハ勞務ニ就カザルコト

五 其ノ他前各號ニ準ズル程度ノ特ニ不都合ナル行爲アリタルコト

労働者勤続三年以上十年未滿ニシテ前項各號ノ一ニ該當スル事由ニ因リ解雇セラレタルトキハ法第二十四條第一項ノ退職手當ハ之ヲ減額シテ支給スルコトヲ得但シ二分ノ一ヲ超エテ減額スルコトヲ得ズ

第二十九條 労働者勤続三年未滿ニシテ自己ノ都合ニ依リ退職シタルトキハ法第二十四條第一項ノ退職手當ハ之ヲ支給セザルコトヲ得

労働者勤続三年以上ニシテ自己ノ都合ニ依リ退職シタルトキハ法第二十四條第一項ノ退職手當ハ退職積立金及退職手當法施行規則

六三一

之ヲ減額シテ支給スルコトヲ得但シ二分ノ一ヲ超エテ減額スルコトヲ得ズ

勞働者退職ヲ申出デタル場合ト雖モ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ前二項ノ規定ハ之ヲ適用セズ

- 一 負傷疾病又ハ老衰ノ爲業務ニ堪ヘザルトキ
- 二 就業規則又ハ之ニ準ズベキモノニ依リ定ムル停年ニ達シタルトキ
- 三 陸海軍ニ徵集又ハ召集セラレタルトキ
- 四 女子勞働者ガ結婚スルトキ
- 五 其ノ他已ムヲ得ザル事由アルトキ

第三十條 勞働者禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルニ依リ又ハ第二十七條各號若ハ第二十八條第一項各號ノ一ニ該當スル事由ニ因リ解雇セラレタルトキハ法第二十六條第一項ノ特別手當ハ之ヲ加算スルコトヲ要ス

第三十一條 法第二十七條第一項ノ許可ノ申請ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
 - 二 事業主ノ氏名及住所
 - 三 常時使用勞働者數
 - 四 特別手當積立金ノ限度ト爲サントスル金額
 - 五 健康保險法ニ依リ使用勞働者ニ付定メタル標準報酬日額ノ合計額
- 法第二十七條第一項ノ許可ヲ受ケタル事業主ハ常時使用勞働者數ニ著シキ増加アリタルトキハ前項第三號及第五號ノ事項ヲ地方長官ニ届出ヅベシ

第三十二條 第二十四條第三項ノ規定ハ法第二十八條第一項ノ規定ニ依リ餘剰ヲ積立ツル場合ニ之ヲ準用ス

第三十三條 法第三十條第一項ノ許可ノ申請ハ退職手當及之ガ支給ニ充ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ノ外左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
 - 二 事業主ノ氏名及住所
 - 三 常時使用勞働者數
- 法第三十條第二項ノ許可ノ申請ハ前項各號ノ事項ノ外左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

- 一 規程ヲ廢止又ハ變更セントスル理由
- 二 規程ヲ廢止セントスル場合ハ其ノ廢止ニ關スル規程及準備積立金ノ現在高、規程ヲ變更セントスル場合ハ其ノ規程

第三十四條 第二十七條乃至第三十條ノ規定ハ法第三十條第三項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第三十五條 第十三條ノ規定ハ法第三十條第四項又ハ法第四十二條ノ規定ニ依リ法第二十一條ノ規定ヲ準用スル場合ニ之ヲ準用ス

第三十六條 第二十四條第一項及第二項ノ規定ハ法第三十條第四項ノ規定ニ依リ法第二十八條第一項ノ規定ヲ準用スル場合ニ之ヲ準用ス

第三十七條 法第四十一條第一項ノ許可ノ申請ハ左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ

退職積立金及退職手當法施行規則

- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
 - 二 事業主ノ氏名及住所
 - 三 常時使用労働者數
 - 四 退職手當ニ關スル規程
 - 五 組合ノ組織（組合規約又ハ之ニ準ズベキモノヲ添附スルコト）
 - 六 退職積立金ニ代ルベキ事項
 - 七 退職手當ノ支給ニ代ルベキ事項
- 法第四十一條第一項ノ許可ヲ受ケタル事業主ハ前項第四號乃至第七號ノ事項ニ變更アリタルトキハ其ノ事項ヲ遲滞ナク地方長官ニ届出ヅベシ
- 第三十八條** 法第四十二條ノ許可ノ申請ハ退職手當及之ガ支給ニ充ツル爲ノ準備積立金ニ關スル規程ノ外左ニ掲グル事項ヲ具シ地方長官ニ之ヲ爲スベシ
- 一 事業ノ名稱、種類及所在地
 - 二 事業主ノ氏名及住所
 - 三 常時使用労働者數
 - 四 法施行前ヨリ引續キ使用スル労働者數
- 第三十九條** 事業主ハ準備積立金臺帳ヲ調製シ左ニ掲グル事項及其ノ年月日ヲ記載スベシ
- 一 準備積立金トシテ積立テタル金額
 - 二 準備積立金ヨリ生ジタル利子及餘剩ヲ積立テタル金額

- 三 準備積立金中ヨリ退職手當トシテ支給シタル金額
 - 四 積立方法別金額
 - 五 準備積立金ヲ運用シタル金額及準備積立金ヘ積戻シタル金額
- 第四十條** 事業主ハ退職積立金及退職手當ニ關スル事項ノ要領ヲ平易ニ記述シ適宜ノ方法ヲ以テ之ヲ労働者ニ周知セシムベシ
- 第四十一條** 第十一條、第十五條乃至第十七條又ハ第三十九條ノ帳簿ハ之ヲ合併スルコトヲ妨ゲズ
- 第四十二條** 退職積立金及退職手當ニ關スル帳簿其ノ他重要ナル書類ハ事業毎ニ之ヲ備置クベシ前項ノ帳簿又ハ書類ハ退職積立金及退職手當ニ關スル事業主ノ義務ヲ完了シタル日ヨリ三年間之ヲ保存スベシ
- 第四十三條** 事業主ハ法又ハ法ニ基ク命令ノ規定ニ依リ事業主ノ爲スベキ事項ニ付豫メ代理人ヲ選任シタルトキハ其ノ旨ヲ地方長官ニ届出ヅベシ
- 第四十四條** 本令中地方長官トアルハ鑛業法ノ適用ヲ受クル事業ニ在リテハ鑛山監督局長トス
- 第四十五條** 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス
- 一 第一條、第二條、第六條、第八條、第十四條第二項（第二十六條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）
 - 二 第二十一條、第二十四條第一項（第三十六條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）、第三十一條第二項又ハ第三十七條第二項ノ規定ニ依ル届出ヲ怠リ若ハ其ノ届出ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者
 - 三 第五條ノ規定ニ依ル手續ヲ怠リタル者
 - 四 第十一條、第十五條乃至第十七條又ハ第三十九條ノ規定ニ依ル帳簿ノ調製若ハ記載ヲ怠リ又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者
 - 五 第十四條第三項（第二十六條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ノ規定ニ依ル命令ニ從ハザル者

附則

本令ハ法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和十二年一月一日ヨリ施行）

銃砲火藥類取締法（拔萃）

明治四十三年四月
法律第五十三號

改正 大正六年第二號、一一年第二號

第六條 軍用銃砲、火藥類ノ讓渡又ハ讓受ハ法令ニ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外其ノ製造者ハ販賣ノ業ヲ營ム者又ハ特ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條 左ノ事項ニ關シ必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

- 一 本法ノ適用ヲ受クヘキ銃砲、火藥類ノ範圍及新規發明ニ係ル火藥類ヲ一定ノ期間試験ノ爲製造スル場合ヲ除クノ外行政官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ營業トシテ製造、變形又ハ修理シ得ル普通火藥類ノ範圍
- 二 銃砲、火藥類ノ取引、授受、使用、運搬、貯藏其ノ他ノ取扱
- 三 銃砲、火藥類ノ取扱人及火藥類ノ作業主任者ニ關スル事項
- 四 銃砲、火藥類製造所及火藥類貯藏所ニ關スル事項
- 五 火藥類ヲ要スル工事又ハ工業ニ關スル事項

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治四十四年三月勅令第十五號ヲ以テ同年五月一日ヨリ施行）

附則（大正十一年法律第二號）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（大正十二年四月勅令第七十五號ヲ以テ同年五月一日ヨリ施行）

銃砲火藥類取締法施行規則（拔萃）

明治四十四年三月
勅令第十六號

改正 大正六年第一八四號、一二年第一七六號
昭和五年第三二〇號

第二條 銃砲火藥類取締法ニ於テ火藥類ト稱スルハ左ニ掲クル火藥、爆藥及火工品ヲ謂フ

- 一 火藥 硝酸鹽類ヲ主トスル有煙火藥、硝化纖維素ヲ主トスル無煙火藥又ハ硝化纖維素トナイトログリセリントノ結合物ヲ主トスル無煙火藥ノ類
 - 二 爆藥 雷酸鹽^{雷汞}ノ類起爆ノ用途ニ供スル窒化物^{窒化鉛}ノ類 其ノ他ノ起爆劑、ナイトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥^{各種ダイナ}、硝酸鹽、鹽素酸鹽若ハ過鹽素酸鹽ヲ主トスル爆發藥又ハ爆發ノ用途ニ供スル棉火藥、芳香系列ノ硝化物^{ナイトロペンジン、ナイトロナフサリン、ナイトロトニリン}及之ヲ主トスル混和物ノ類
 - 三 火工品、實包、空包、藥筒、藥包、彈藥筒、火藥若ハ爆藥ヲ裝填シタル彈丸若ハ水雷、雷管、信管、爆管、門管、緩燃導火線^{一尺ノ燃焼時間十秒}以上ヲ要スルモノ、速燃導火線又ハ煙火其ノ他火藥若ハ爆藥ヲ使用シタル火工品但シ玩具用普通火工品ヲ除ク
- 雷管又ハ信管ヲ裝置シタル導火線ハ雷管又ハ信管ト看做ス

第十六條 火藥類讓渡ノ許可ハ所轄府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

火藥類讓受ノ許可ハ消費地應府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ但シ消費地定マラス若ハ二箇所以上ニ互リ又ハ銃砲火藥類取締法施行區域外ニ係ル場合ハ所轄府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

銃砲火藥類取締法施行規則

第十七條 左ノ各號ノ火藥類ノ讓渡及讓受ニ付テハ内務大臣ノ定メタル場合ニ限り前條ノ區分ニ依リ警察官署ニ之ヲ申請スルコトヲ得

- 一 火藥 三貫以内
- 二 爆藥 一貫三百匁以内
- 三 工業用雷管 二千箇以内
- 四 信管 千箇以内
- 五 爆管 千箇以内
- 六 門管 千箇以内
- 七 導火線 五百間以内

第十八條 軍用銃砲又ハ左ノ各號ノ火藥類ノ讓渡及讓受ノ許可ハ所轄警察官署ニ之ヲ申請スヘシ

- 一 火藥 一貫三百匁以内
- 二 銃用實包 千箇以内
- 三 銃用空包 千箇以内
- 四 銃用實包又ハ銃用空包ニ要スル雷管又ハ雷管附藥莖 二千箇以内

第十九條 前條ノ許可ハ二月間其ノ效力ヲ有ス
前三條ノ許可ハ許可ヲ爲シタル行政官應取締上必要ト認ムルトキハ何時ニテモ取消スコトヲ得
前三條ノ規定ニ依ル讓受ノ許可ハ讓受ヲ要スル事由ノ消滅ニ依リ其ノ效力ヲ失フ

第二十一條 鑛業法ニ依リ鑛物ノ試掘若ハ探掘ヲ爲ス者又ハ内務大臣ノ定ムル所ニ依リ工事若ハ工

業ノ爲火藥類消費ノ許可ヲ受ケタル者カ其ノ消費スル火藥類ヲ讓受クル場合ニ於テハ第十七條各號ノ火藥類ニ限り、狩獵免許ヲ受ケタル者カ其ノ消費スル火藥類ヲ讓受クル場合ニ於テハ第十八條各號ノ火藥類ニ限り行政官應ノ許可ヲ要セサルモノトス

第二十七條 火藥類ハ第十八條各號ノ一ニ該當スルモノ及左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ヲ除クノ外火藥庫又ハ倉庫以外ノ場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得ス

- 一 土工其ノ他一時ノ事業ニ要スル火藥類ヲ其ノ事業中假貯藏所ニ貯藏スル場合
- 二 一月以内ニ完了スヘキ土工其ノ他ノ事業ニ要スル火藥類ニシテ第十七條各號ノ一ニ該當スルモノヲ其ノ事業中十日以内ヲ限り所轄警察官署ノ許可ヲ受ケ其ノ指定シタル安全ノ場所ニ貯藏スル場合
- 三 火藥ヲ裝填セサル雷管附藥莖ヲ安全ナル場所ニ貯藏スル場合

第二十八條 火藥類貯藏所ニ貯藏スル火藥類ハ左ノ數量ヲ超過スルコトヲ得ス

貯藏所ノ種類		火藥類ノ種類	
火藥庫	倉庫	火藥	爆藥
假貯藏所	五千貫	一萬貫	五千貫
火藥庫	十二貫	十貫	三貫
倉庫	二千五百貫	三貫	三萬箇
假貯藏所	五千貫	一萬貫	二千萬箇

銃砲火藥類取締法施行規則

銃用空包	二千萬筒	三萬筒	千萬筒
銃用雷管	五千萬筒	十萬筒	五百萬筒
工業用雷管	三百萬筒	一萬筒	三十萬筒
信管、爆管、門管	無制限	三萬筒	無制限

前項ニ揚ケサル火工品ハ其ノ原料タル火藥又ハ爆藥ノ數量ニ依リ前項ノ規定ヲ適用ス但シ雷管附藥莖及導火線ハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 内務大臣ハ安全ナル位置ニ於テ特別ノ設備ヲ爲シタル火藥庫ニ付危險ノ慮ナシト認ムル程度ニ於テ前條ノ數量ヲ超過スル火藥類ノ貯藏ヲ許可スルコトヲ得

第三十一條 火藥類ハ内務大臣ノ定ムル區別ニ依リ各別棟ノ火藥類貯藏所ニ之ヲ貯藏スヘシ但シ倉庫ニ在リテハ不燃質物ノ以テ造リタル隔壁ニ依リ遮斷スル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第三十二條 火藥類貯藏所ノ新設ハ所在地應府縣長官ノ許可ヲ受クヘシ其ノ増築、改築、修繕又ハ模様替ノ工事ヲ爲ストキ亦同シ

工事ヲ竣リタル火藥類貯藏所ハ警察官ノ検査ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第三十三條 第二十八條ノ規定ニ依リ火藥類貯藏所ニ貯藏スルコトヲ得ヘキ最大數量ノ火藥類ノ貯藏ニ付テハ倉庫ヲ除クノ外其ノ外壁ヨリ左ノ距離ヲ保有スヘシ

一 宮城、離宮、御用邸又ハ神宮へ二十町以上

二 皇陵、社寺、學校、公園、電氣瓦斯若ハ石油ノ工場、電力若ハ火力ヲ使用スル工場、發火質物件ヲ蓄積スル場所、鐵道、軌道、汽船ノ常航路若ハ繫留所又ハ市街地へ四丁以上

三 宅地、國道、縣道、電線、瓦斯ノ傳導管、火ヲ取扱フ場所、蓄積シタル燃燒物其ノ他内務大臣ノ指定シタル箇所へ五十間以上

前項ノ距離ヲ貯藏數量ノ増減ニ從ヒ貯藏數量ノ平方根ニ比例シテ之ヲ増減ス但シ各距離ノ五分ノ一ヲ下ルコトヲ得ス

倉庫ハ其ノ外壁ノ周圍ニ一間以上ノ空地ヲ保有スヘシ但シ貯藏數量ヲ減少シ特ニ應府縣長官ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

應府縣長官ハ必要ト認ムルトキハ假貯藏所ニ付第一項及第二項ノ規定ニ依ル距離以上ニ於テ特ニ其ノ距離ヲ指定スルコトヲ得

火藥類貯藏所相互ノ距離ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第三十四條 内務大臣ハ天然又ハ人造ノ掩體ノ狀態其ノ他土地又ハ設備ノ狀況ニ依リ危險ノ慮ナシト認ムル程度ニ於テ前條ニ定ムル距離ノ減少ヲ許可スルコトヲ得

第三十五條 第二十九條及前條ノ許可ハ狀況ノ變更ニ依リ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第三十六條 第二十八條ノ規定ニ依リ倉庫ニ貯藏スルコトヲ得ヘキ數量ヲ超過スル火藥類ハ所轄警察官署ノ許可ヲ受クルニ非サレハ同時ニ之ヲ運搬スルコトヲ得ス

第三十七條 火藥類ハ他ノ物件ト混包シ又ハ變裝若ハ假裝シテ之ヲ所持、運搬又ハ託送スルコトヲ得ス

前項ノ物件ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官ニ之ヲ届出ツヘシ

第三十八條 地盤又ハ物件ヲ破碎スルノ目的ヲ以テ火藥又ハ爆藥ヲ使用セムトスル者ハ使用地警察官署ノ許可ヲ受クヘシ但シ内務大臣カ特ニ定メタル場合又ハ鑛業法ニ依ル鑛物ノ試掘若ハ探掘ニ關シテハ此ノ限ニ在ラス

第四十一條 火藥類ノ運搬、所持其ノ他ノ取扱ハ未成年者之ヲ爲シ又ハ未成年者、白痴者若ハ瘋癲者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得ス但シ第十八條各號ノ火藥類ニ付テハ十五歳以上ノ者ニ限り之ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十三條 試験ノ結果不良品、認定セラレタル火藥類ハ内務大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ所持者ニ於テ直ニ必要ナル處置ヲ爲スヘシ

第五十條 左ノ事項ハ内務大臣之ヲ定ム但シ鐵道ニ依ル輸送ニ關スル事項ハ鐵道大臣、郵便及船舶ニ依ル輸送及船舶ニ於ケル常用火藥類ノ貯藏ニ關スル事項ハ遞信大臣之ヲ定ム

一 火藥類ノ貯藏、收納、荷造其ノ他ノ取扱ノ方法及制限

二 第四十三條ノ規定ニ依ル火藥類試験及不良品處置方法

三 火藥類運搬ノ方法及制限

四 火藥類作業所及火藥貯藏所ノ設備

五 火藥類作業所及火藥類貯藏所ニ於テ遵守スヘキ事項

第五十一條 前條ノ規定ニ依ル命令ハ鑛業法第七十一條ノ規定ニ依リ商工大臣ノ發スル命令ノ效力ヲ妨クルコトナシ

銃砲火藥類取締法施行細則 (拔萃)

明治四十四年三月
内務省令第二號

改正 大正三年第二六號、六年第一六號
一二年第一一號

第四條 火藥類取扱免狀ハ甲乙ノ二種トシ左ノ資格ヲ有スル者ニ限り本人ノ申請ニ依リ廳府縣長官銓衡ノ上之ヲ交付ス

甲種

一 實業學校令ニ依ル甲種實業學校又ハ之ト同等以上ノ學校其ノ他内務大臣ノ指定シタル學校ニ於テ火藥類ニ關スル學科ヲ修得シ五月以上直接火藥類ノ取扱ニ干與シタルノ履歴ヲ有スル者

二 陸軍工科學校ニ於テ火工術ヲ專修シタル者

三 陸軍又ハ海軍ニ於テ火藥類ノ取扱ヲ爲スニ充分ナル技能ヲ有スルノ證明書ヲ付與シタル者

四 別ニ定ムル規定ニ依リ試験ヲ受ケ合格シタル者

乙種

一 五月以上直接火藥類ノ取扱ニ干與シタル履歴ヲ有スル者

第五條 一年間五千貫以上ノ火藥又ハ二千五百貫以上ノ爆藥ヲ取扱フ場合ニ於テハ甲種火藥類取扱免狀ヲ有スル者其ノ取扱ニ任スルコトヲ要ス

火藥及爆藥ヲ共ニ取扱フ場合ニ於テ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ爆藥一貫ヲ火藥二貫ト看做ス

第六條 火藥類取扱人ヲ定メタルトキハ其ノ氏名、履歴及火藥類取扱免狀ノ種別ヲ具シ火藥類販賣業者ニ在テハ營業地、其ノ消費者ニ在テハ消費地警察官署ニ之ヲ届出ツヘシ但シ消費地定マラス

若ハ二箇所以上ニ互リ又ハ銃砲火藥類取締法施行區域外ニ係ル場合ハ所轄警察官署ニ之ヲ届出ツ
ヘシ

第九條 銃砲火藥類製造業者又ハ販賣業者ニ非サル者第二十一條第一項、第二十二條及第二十二條
ノ二ニ依リ交付ヲ受ケタル許可證、認可證、讓受證書又ハ委任狀ハ十日以内ニ所轄警察官署ニ之
ヲ差出スヘシ

第十四條 銃砲火藥類取締法施行規則第十六條第十七條及第十八條ニ依ル許可申請書ニハ讓渡シ又
ハ讓受クヘキ銃砲火藥類ノ種類、數量、讓渡又ハ讓受ノ事由並火藥類ノ讓受ニ在テハ用途、消費
ノ時、場所若シ消費ノ時又ハ場所定マラサルトキハ其ノ事由ヲ具スルコトヲ要ス但シ讓渡ニ付許
可ヲ要スル者ヨリ火藥類ヲ讓受クル場合ニ於テハ讓受ノ許可申請ニ際シ讓渡ノ許可アリタルコト
ヲ證明スルコトヲ要ス

銃砲火藥類取締法施行規則第十六條及第十七條ノ規定ニ依ル火藥類讓受許可申請書ニ具スヘキ火
藥類ノ數量ハ一年ヨリ長カラサル一定ノ期間ニ於ケル需用ノ數量ヲ以テスルコトヲ得

銃砲火藥類取締法施行規則第二十二條第二項ノ規定ニ依ル認可申請書ニハ處分スヘキ火藥類ノ種
類、數量、處分ノ方法及事由ヲ具スルコトヲ要ス

第十五條 工食用、鑛業用、漁業用、船内銃砲用又ハ煙火製造用其ノ他工業用ニ充ツル火藥類ニ付
テハ銃砲火藥類取締法施行規則第十七條ヲ適用ス

第十六條 銃砲火藥類取締法規則第二十一條ノ規定ニ依ル工事若ハ工業ノ爲火藥類ヲ消費スルノ許
可ハ所轄廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

前項ノ許可申請書ニハ工事又ハ工業ノ種類、所要火藥類ノ種類、數量及其ノ使用ノ方法ヲ具スル
コトヲ要ス

第十七條 行政官廳軍用銃砲火藥類ノ讓渡、讓受又ハ運搬ノ許可若ハ銃砲火藥類取締法施行規則第
二十二條第二項ノ規定ニ依ル火藥類讓渡ノ認可又ハ拳銃、短銃、仕込銃ノ授受、運搬、携帶ノ許
可ヲ爲ストキハ許可證又ハ認可證ヲ交付スルモノトス

銃砲火藥類取締法施行規則第十六條及第十七條ノ規定ニ依ル火藥類讓受許可證ハ第二十一條第二
項ニ定メタル記入ノ餘白ナキニ至リタルトキハ之ヲ返納シテ新許可證ノ交付ヲ申請スルコトヲ得
本條ノ許可證又ハ認可證ハ甲號乃至己號様式ニ依ルモノトス

第十八條 前條ノ許可證ハ許可取消サレ又ハ其ノ效力ヲ失ヒタルトキハ十日以内ニ所轄警察官署
ニ之ヲ返納スヘシ

第十九條 軍用銃砲、拳銃、短銃、仕込銃、火藥類又ハ第十七條ノ許可證、認可證ヲ喪失シ、盜取
セラレ又ハ其ノ所在不明トナリタルトキハ本人又ハ其ノ事實ヲ知りタル者ニ於テ其ノ事實ヲ知リ
タル時ヨリ二十四時間以内ニ銃砲火藥類ノ種類、數量又ハ許可證、認可證ノ種類、之ヲ下付シタ
ル官廳名ヲ最寄警察官署ニ届出ツヘシ

第二十條 前條ノ届出ヲ爲シタル場合ニ於テハ許可又ハ認可ヲ爲シタル官廳ニ事由ヲ説明シテ許可
證又ハ認可證ノ再下付ヲ申請スルコトヲ得

第二十一條 軍用銃砲、拳銃、短銃、仕込銃、火藥類讓受ノ許可證ハ銃砲火藥類ヲ讓受クルノ際之
ヲ讓渡人ニ、其ノ讓渡ノ許可證又ハ認可證ハ銃砲火藥類ヲ讓渡スノ際之ヲ讓受人ニ交付スヘシ

銃砲火藥類取締法施行規則第十六條及第十七條ノ規定ニ依ル火藥類讓受ノ許可證ヲ有スル者ニ火藥類ヲ讓渡ス者ハ火藥類ノ種類、數量及讓渡ノ年月日ヲ許可證ニ記入シ署名捺印ノ上讓渡シタル數量カ許可數量ニ達セサルトキハ其ノ許可證ヲ讓受人ニ返付スヘシ

第二十二條 銃砲火藥類取締法施行規則第二十一條ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケスシテ火藥類ヲ讓受クル者ハ行政官廳ノ與ヘタル許可ノ文書其ノ他資格ヲ證明スルコトヲ得ヘキ文書ヲ讓受人ニ提示シ且鑛業法ニ依リ鑛物ノ試掘若ハ探掘ヲ爲ス者又ハ第十六條ニ依リ工事若ハ工業ノ爲火藥類消費ノ許可ヲ受ケタル者ニ在リテハ讓受クヘキ火藥類ノ種類、數量、讓受ノ事由、用途、消費ノ時、場所、鑛業、工事若ハ工事ノ種類、試掘又ハ探掘權登錄番號若ハ消費許可證番號ヲ具シタル讓受證書ヲ交付スヘシ

第二十二條ノ二 委任ニ依リ銃砲火藥類ヲ讓受クル者ハ前二條ノ許可證、認可證若ハ讓受證書ト共ニ委任狀ヲ讓渡人ニ交付スヘシ

第二十三條 銃砲火藥類製造業者又ハ販賣業者ニ非サル者相續、遺贈又ハ法人ノ合併ニ因リテ軍用銃砲、拳銃、短銃、仕込銃又ハ銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號以外ノ火藥類ノ所有權ヲ取得シタルトキハ取得ノ日ヨリ十日以内ニ所轄警察官署ニ之ヲ届出ツヘシ

第二十七條 緩燃導火線及煙火ヲ除クノ外火藥類ハ左ノ各號ノ規定ニ從ヒ之ヲ收納又ハ貯藏スヘシ
一 火藥及導火線ハ木器、亞鉛器、銅器ニ收納スルコトヲ要ス但シ硝化纖維素ヲ主トスル無煙火藥ニシテ火藥類保存上有害ナル酸類又ハ鹽基類ヲ含マサル紙若ハ布ヲ以テ包ミタルモノニ在リテハ錫引又ハ亞鉛引鐵器ニ、少量ノ火藥ニ在リテハ白鐵葉器ニ收納スルコトヲ得

二 火工品(導火線ヲ除ク)ハ木器、亞鉛器、銅器、白鐵葉器、厚紙製罐ニ收納スルコトヲ要ス但シ其ノ形狀巨大ニシテ收納ニ適セサルモノハ此ノ限ニ在ラス

三 ビクリン酸ハ陶器、磁器、純錫器、純アルミニウム器、硝子器又ハ木器ニ、其ノ他ノ爆藥ハ其ノ種類ニ應シ木器、紙器、亞鉛器、護謨器又ハ硝子器ニ收納スルコトヲ要ス但シ硝酸アンモニアヲ主トスル爆藥ニシテナイトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有セサルモノニ在リテハ白鐵葉器ニ收納スルコトヲ得

四 雷汞ハ清水ニ満たセル硝子器ニ收納シテ貯藏スルコトヲ要ス
五 火藥、爆藥ハ容器ト火藥類ト直接ニ接觸セサル爲火藥類保存上有害ナル酸類又ハ鹽基類ヲ含マサル紙若ハ布ヲ以テ隔絶スヘシ但シ容器ノ内面ニ漆又ハセルラツクノ類ヲ塗布シタル場合若ハ少量ノ火藥ヲ收納スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

六 (削除)
七 火藥類ハ乾燥性油紙桐油、花油又ハ亞麻仁油紙ノ類ヲ以テ之ヲ包被スルコトヲ得ス
八 各種ダイナマイトヲ收納スル容器ハ常ニ其ノ内部ノ藥包ヲ横置セシムルコトヲ要ス
九 各種ダイナマイトニシテ貯藏中藥包ヨリナイトログリセリン滲出シテ容器ノ外面若ハ床上ヲ汚染シタルトキハ苛性曹達ノアルコール溶液苛性曹達五十瓦ヲ水七十五立方センチメートルニ溶解シ之ヲアルコール五百立方センチメートルニ混シタルモノヲ注キナイトログリセリンヲ分解セシメ布片ヲ以テ清拭スヘシ

十 各種ダイナマイトニシテ貯藏中凍結シタルトキハ妄ニ融解シ若ハ搬出スルコトナク庫内ニ寒氣ノ侵入ヲ防止シ自然ニ融解セシメ又ハ水分ヲ藥包ニ觸接セシメサルノ裝置ヲ爲シタル容器ニ

之ヲ收容シ温湯ニ浸シテ間接ニ融解セシムヘシ

十一 火藥類ハ第二十八條ノ區別ニ依リ互ニ融離スヘシ

十二 火藥類ヲ收納シタル容器ヲ外箱ニ入ルルニハ容器ト外箱トノ間ニ空隙又ハ火藥類粉末ノ殘留ナキヲ要ス

十三 一旦使用シタル火藥類ノ容器又ハ其ノ外箱ハ適宜ノ方法ニ依リ清掃淨拭スルニ非サレハ再ヒ火藥類ヲ收納スルコトヲ得ス

十四 火藥類ノ容器ノ外箱ハ鐵類ヲ露スコトヲ得ス

第二十八條 銃砲火藥類取締法施行規則第三十一條ノ規定ニ依リ火藥類ヲ各別棟ノ火藥類貯藏所ニ貯藏スルハ左ノ各號ノ區別ニ依ル

一 有煙火藥、有煙火藥ヲ裝填シタル銃用實包、銃用空包及有煙火藥ノミヲ裝填シタル其ノ銃ノ火工品硝酸鹽、鹽素酸鹽若ハ過鹽素酸鹽ヲ主トスル爆藥ニシテ有機硝化物ヲ有セサルモノ

二 無煙火藥、無煙火藥ヲ裝填シタル銃用實包、銃用空包及無煙火藥ノミヲ裝填シタル其ノ他ノ

火工品

三 爆藥

四 火工品

前項第三號ヲ除クノ外各號中ノ二種類以上ヲ同棟ニ貯藏スルニハ各種類毎ニ銃砲火藥類取締法施行規則第二十八條ニ掲ケタル數量ヲ以テ貯藏セムトスル數量ヲ除シ其ノ商ヲ加ヘ其ノ和一ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十九條 火藥類貯藏所ニ火藥類ヲ貯藏スルニハ内壁ヨリ一尺以上ヲ隔テ下部ニハ高サ約三寸ノ

枕木ヲ置キテ容器ヲ積上クヘシ

火藥類貯藏所ニ於テハ警察官署ノ指定ニ從ヒ換氣ニ注意スヘシ

火藥類貯藏所内ノ溫度ハ無煙火藥ヲ貯藏スル場合ニ於テ攝氏三十一度以下爆藥ヲ貯藏スル場合ニ於テ攝氏九度以上三十六度以下ヲ保ツコトニ注意スヘシ

火藥類貯藏所ニ於テハ携帶電燈ノ外燈火ヲ携フルコトヲ得ス

火藥類貯藏所ニ於テハ荷造、荷解ヲ爲シ又ハ鐵類若ハ鐵類ノ附屬シタル器具ヲ帶ヒ又ハ靴若ハ土足ノ儘入ルコトヲ得ス戸外ニ於テ先ツ塵埃ヲ拂ヒ且上草履ヲ穿ツヘシ

火藥庫及貯藏所ニハ他ノ物品ヲ貯藏スルコトヲ得ス

第二十六條第一項第二號、第二十一號、第二十二號、第二十四號、第二十五號、第二十九號及其ノ罰則ノ規定ハ火藥庫及假貯藏所ニ之ヲ準用シ同條第一項第二十二號、第二十四號、第二十九號及其ノ罰則ノ規定ハ倉庫ニ之ヲ準用ス

第三十條 火藥類ヲ消費スル者ハ消費地警察官署ノ指示ニ從ヒ火藥類ノ收支ヲ明ニスヘシ但シ一年間ニ於テ銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號以内ノ火藥類ヲ消費スル者ハ此ノ限ニ在ラス

第三十一條 銃砲火藥類取締法施行規則第三十二條第一項ノ許可申請書ニハ位置、設備又ハ増築、改築、修繕若ハ模様替ノ仕様並貯藏スヘキ火藥類ノ種類、數量ヲ具スルコトヲ要ス

假貯藏所ニ在テハ前項ノ外火藥類ヲ要スル事業及期間ヲ具スルコトヲ要ス

第三十二條 火藥庫ノ設備ハ左ノ各號ノ制限ニ從フヘシ但シ地下又ハ水上ニ設クル火藥庫ニ關シテ

銃砲火藥類取締法施行細則

ハ應府縣長官ノ許可ヲ得テ特別ノ設備ヲ爲スコトヲ得

一 火藥庫ハ土藏造、鐵筋コンクリート造、煉瓦造又ハ石造ノ平屋建ナルコト

二 火藥庫ノ屋根ノ外面ハ薄キ金屬板、石盤板又ハ瓦若ハ輕量ノ不燃質物ヲ用キテ覆葺シ且盜難ヲ防キ得ヘキ構造ト爲スコト

三 庫壁ハ土造、鐵筋コンクリート造ノ部分ニ於テ厚サ五寸以上、煉瓦造、石造ノ部分ニ於テ厚サ七寸以上トシ窓ニハ透明ノ硝子ヲ用キルコトナク且扉ニハ防火ノ設備ヲ爲スコト

四 庫ノ内面ハ石、瓦、ベント、土砂ノ剝落飛散ヲ防クノ裝置ヲ爲シ鐵類ヲ露ハササルコト

五 床ハ密ニ張詰メ鐵類ヲ露ハササルコト

六 火藥庫ニハ避雷針ヲ設クルコト但シ避雷針ニ代ルヘキ裝置アルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得ト
ト
避雷針ハ其ノ尖頭ヨリ屋端ノ最モ遠隔セル點ニ至ル想像的直線ト四十五度以内ノ角度ヲ有ツコト

七 無煙銃用實包又ハ無煙銃用空包ヲ貯藏スル火藥庫ノ周圍ニハ土堤又ハ鐵筋コンクリート造、煉瓦造若ハ石造ノ圍壁ヲ、其ノ他ノ火藥類ヲ貯藏スル火藥庫ノ周圍ニハ土堤ヲ庫壁ノ外側面ヨリ堤脚又ハ壁脚迄三尺乃至六間ノ距離ニ於テ可成庫壁ニ接近シテ設クルコト但シ應府縣長官ハ天然又ハ人造ノ掩體ノ狀態其ノ他土地ノ狀況ニ依リ危險ノ虞ナシト認ムルトキハ土堤又ハ圍壁ノ全部又ハ一部ノ省略ヲ許可スルコトヲ得

火藥庫二棟以上相接スル場合ニ於テ各庫ノ土堤又ハ圍壁ハ相兼ヌルコトヲ得

土堤又ハ圍壁ハ堤外ヨリ火藥庫ヲ通視シ能ハサラシムルカ爲其ノ一端ヲ屈折延長スルカ又ハ通路ノ入口ノ前面ニ更ニ土堤又ハ圍壁ヲ設ケ若ハ土堤ノ入口ヲ隧道ト爲シ其ノ兩端ニ堅固ナル扉ヲ設クルコト

無煙銃用實包又ハ無煙銃用空包ヲ貯藏スル火藥庫ノ土堤又ハ圍壁ノ高サハ火藥庫ノ軒桁ノ高サト、其ノ他ノ火藥類ヲ貯藏スル火藥庫ノ土堤ノ高サハ火藥庫ノ屋頂ノ高サト同一以上、圍壁ノ厚サハ一尺五寸以上、土堤ノ頂部ノ厚サハ三尺以上トシ堤面ハ芝草類ヲ以テ被覆スルコト但シ堤脚ハ火藥庫ノ屋頂ノ高サノ三分ノ一ニ至ル迄土留ヲ石積、煉瓦積又ハコンクリート造ト爲スコトヲ得

八 土堤ノ外部ニ於テ餘地アルトキハ常磐木ヲ栽植スルコト

第三十三條 倉庫ノ設備ハ前條ノ規定ヲ準用ス但シ避雷針及土堤ニ關シテハ前條ノ規定ニ拘ラス左ノ各號ノ規定ニ依ルコトヲ得

一 避雷針及之ニ代ルヘキ裝置ヲ省略スルコト

二 庫壁ノ外側面ニ觸接シ高サハ倉庫ト同シク厚サハ頂部ニ於テ二尺以上ヲ有シ礫ノ混入セサル土ヲ以テ積上ケタル外層ニ依リ圍繞（入口ノ部分ヲ除ク）シ土堤ヲ省略スルコト但シ庫壁ニシテ其ノ厚サ二尺若ハ之ト同一ノ抗力ヲ有スルトキハ外層ヲ省略スルコトヲ得

倉庫ノ入口ハ危險ノ虞少ナキ側面ニ之ヲ設ケ其ノ前面ニ掩體ヲ有セサル場合ハ其ノ扉ヲ堅固ナラシムヘシ

第三十四條 假貯藏所ノ設備ニ付テハ應府縣長官ノ命令ニ從フヘシ

銃砲火藥類取締法施行細則

第三十七條 銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號以外ノ火藥類ハ警察官署ノ許可ヲ受クルニ非

サレハ日出前又ハ日没後ニ於テ荷造、荷解、荷積、荷卸又ハ授受スルコトヲ得ス

第四十一條 無煙火藥又ハ爆藥(ナイトログリセリン又ハ)ヲ貯藏スル火藥庫又ハ假貯藏所ニハ夏季

ナイトログリセリン又ハ之ヲ主トスル爆藥ヲ貯藏スル火藥庫又ハ假貯藏所ニハ夏季及冬季示差寒

暖計ヲ備ヘ毎週一回之ヲ檢シ其ノ溫度ヲ明記シ置クヘシ

示差寒暖計ヲ備フルハ夏季之ヲ最高溫度ノ位置ニ於テ冬季之ヲ最低溫度ノ位置ニ於テスヘシ

本條ニ於テ夏季ト稱スルハ毎年七月ヨリ九月ニ至リ冬季ト稱スルハ毎年十二月ヨリ二月ニ至ル期

間ヲ謂フ但シ土地ノ氣候ニ應シ應府縣長官特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第四十二條 無煙火藥、棉火藥又ハナイトログリセリン若ハ硝化纖維素ヲ含有スル爆藥ニ在リテハ

其ノ容器ノ内箱ニ藥粒又ハ藥包ト共ニ青色リトマス試験紙ヲ入レ置キ三月毎ニ之ヲ交換スヘシ但

シ製造所及製造年月日ヲ同クスル同種類ノ火藥類ニシテ製造後二年ヲ經過セサルモノハ其ノ外箱

二十五箱端數ハ二十五ニ付、製造後二年以上ヲ經過シタルモノハ十箱ニ切上クニ付各一箱以上

ノ割合ヲ以テ青色リトマス試験紙ヲ入レ置キ他ハ之ヲ省略スルコトヲ得

前項ノ試験紙全面ニ涉リ赤色ニ變シタルトキハ收納セル火藥、爆藥及同一貯藏所内ニ貯藏セル同

種類ノ火藥、爆藥ニシテ其ノ製造所及製造年月日ヲ同クスルモノハ之ヲ注意品トス

第四十三條 火藥、爆藥ニシテ盛ニ赤色瓦斯ヲ發生シ又ハ變質ノ爲刺戟性ノ臭氣ヲ放ツモノハ之ヲ

不良品トス

第四十四條 第四十二條ノ注意品硝酸アンモニアヲ主トスル爆藥ニシテナイトログリセリン又ハ硝

化纖維素ヲ含有スルモノ及硝酸アンモニアヲ含有スルダイナマイ

トヲニシテ前條ノ作用ヲ起ササルトキハ外箱一箱毎ニ左ノ方法ニ依リ遊離酸試験ヲ行フヘシ但シ

除クニ試験ヲ省略シ直ニ第四十六條ノ耐熱試験ヲ行フコトヲ得

試験スヘキ火藥類ハ其ノ包被物ヲ除去シ之ヲ硝子瓶ニ入レ瓶内ノ高サ約五分ノ三ニ至ラシメタル

後青色リトマス試験紙ヲ火藥類ノ上面ヨリ稍上方ニ吊シ直ニ瓶口ヲ密栓スヘシ

前項ノ場合ニ於テ無煙火藥及棉火藥ハ六時間内、其ノ他ノ火藥類ハ四時間内ニ試験紙ヲ其ノ全面

ニ涉リ赤色ニ變シタルモノハ不良品トス

第四十五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ耐熱試験ヲ行フヘシ

一 遊離酸試験ノ結果前條ノ不良品ニ該當セサルトキ

二 注意品タル火藥類ヲ汽車又ハ汽船等ニ依リ輸送セムトスルトキ及輸送ヲ終リタルトキ

三 硝酸アンモニアヲ主トスル爆藥ニシテナイトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有スルモノ若

ハ硫酸アンモニアヲ含有スルダイナマイトニシテ第四十二條ノ注意品ニ該當スルトキ

四 前各號ノ外警察官署ノ指示アリタルトキ

第四十六條 耐熱試験ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フヘシ

湯煎器ノ口際迄水又ハ微温湯ヲ滿シテ銅網上ニ之ヲ熱スルノ裝置ヲ爲シ蓋孔ヨリ寒暖計ヲ挿入シ

木栓若ハ護謨栓ヲ以テ之ヲ保持スヘシ

試験スヘキ火藥類ハ左ノ各號ノ區別ニ從ヒ試料ヲ作り之ヲ試験管中徑約十九耗高ニ入ルヘシ

一 硅藻土質ダイナマイトハ其ノ二十瓦乃至三十瓦ヲ採リ靜ニ壓シ細粒ト爲シ之ヲ口徑約五種ノ

硝子製漏斗ノ底部ニ精製無水石綿若ハ精製脫脂綿ノ小片ヲ置キタル上ニ入レ硝子棒ニテ其ノ表

銃砲火藥類取締法施行細則

面ヲ平ニシ尙其ノ上部ヲ三耗ノ厚サニ精製硅藻土又ハ精製石綿粉ヲ以テ覆ヒ徐々ニ上面ヨリ蒸溜水ヲ滴下シ漏斗ノ下端ヨリ流出スルナイトログリセリン三瓦乃至三瓦半ヲ採リ之ヲ試験管ニ入ルヘキ試料トス

二 膠質ダイナマイトハ其ノ三瓦半ヲ採リ硝子板上ニ於テ米粒大ニ細截シ乳鉢ニ入レ精製滑石粉

七瓦ヲ加ヘ木製乳棒ヲ以テ靜カニ輕ク完全ニ摺リ混セ之ヲ一試験管ニ入ルヘキ試料トス

三 硅藻土質及膠質以外ノダイナマイトニシテ乾燥セルモノハ其ノ儘、吸濕ノ疑アルモノハ攝氏

四十五度ニテ約五時間乾燥シタル後三瓦半ヲ採リ之ヲ一試験管ニ入ルヘキ試料トス

四 無煙火藥ニシテ粒狀ノモノハ其ノ儘、方形、帶狀又ハ紐狀ノモノハ鉋、小刀又ハ鋏ヲ以テ細

粒狀ニ削截シ試験管ノ高サノ五分ノ三ニ應スル量ヲ採リ之ヲ一試験管ニ入ルヘキ試料トス

五 棉火藥及其ノ他ノ爆藥ニシテ乾燥セルモノハ其ノ儘、濕潤セルモノハ攝氏六十度ノ溫度ニテ

約五時間乾燥シタル後試験管ノ高サノ三分ノ一ニ應スル量ヲ採リ之ヲ一試験管ニ入ルヘキ試料トス

沃度加里澱粉紙ノ上部ヲ蒸溜水及グリスリンノ等分混液ヲ用キ玻璃棒ニテ潤シ之ヲ玻璃桿鉤ニ懸吊シ桿ヲ保持セル木栓ヲ以テ試験管口ヲ掩ヒ沃度加里澱粉紙ノ下縁ヲシテ火藥類上面ヨリ稍

上方ニ在ラシムヘシ

前各項ノ準備ヲ爲シタル後湯煎器ヲ熱シ攝氏六十五度ノ溫度ヲ保持スルニ至ラハ試験管ヲ寒暖

計ト同シ深サニ蓋孔ヨリ挿入シ沃度加里澱粉紙ノ乾濕分界部ヲ注視シ試験管挿入ノ時ヨリ其ノ

淡褐色ニ變スルニ至ルノ時間ヲ以テ火藥類ノ耐熱時間ト定ムヘシ

沃度加里澱粉紙ニ現ハルル褐色線ノ濃度ハ標準色紙ト對照シテ之ヲ定ムヘシ

標準色紙及沃度加里澱粉紙並精製滑石粉ハ官廳ニ於テ製造シタルモノヲ用ウヘシ

第四十七條 火藥類ノ耐熱時間八分以下ナルトキハ之ヲ不良品トス

第四十七條ノ二 硝酸アンモニアヲ主トスル爆藥ニシテナイトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有

セサルモノニ在リテハ製造後二年ヲ經過セサルモノハ毎年一回、製造後二年以上ヲ經過シタルモ

ノ又ハ製造年月不明ノモノハ六月毎ニ一回、第四十四條第二項ノ方法ニ依リ遊離酸試験ヲ行フヘ

シ

前項ノ場合ニ於テ四時間内ニ試験紙ヲ其ノ全面ニ涉リ赤色ニ變シタルトキハ更ニ加熱試験ヲ行フ

ヘシ

第四十七條ノ三 加熱試験ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フヘシ

徑約三十五ミリメートル高サ約五十ミリメートルノ秤量壺ヲ乾燥器内ニ於テ乾燥スヘシ

試験スヘキ爆藥中ヨリ試料十グラムヲ採リ之ヲ前項ノ秤量壺ニ入レ密栓シ秤量シタル後栓ヲ除キ

攝氏七十五度乃至八十度ニ熱シタル乾燥器内ニ四十八時間靜置スヘシ

前項ノ試験中盛ニ赤色瓦斯ヲ發生スルトキハ之ヲ不良品トス此ノ作用ヲ起ササルトキハ再ヒ之ヲ

密栓シ其ノ重量ヲ秤ルヘシ其ノ減耗量百分ノ一以上ナルトキハ之ヲ不良品トス

試験スヘキ火藥ニシテ濕氣ヲ吸收シタル疑アルトキハ先ツ其ノ試料ヲ攝氏七十五度乃至八十度ニ

熱シタル乾燥器内ニ於テ約五時間乾燥シタル後秤量シ第二項第三項ノ方法ニ依リ試験ヲ行ヒ試験

中盛ニ赤色瓦斯ヲ發生スルカ又ハ前項ノ方法ニ依リ秤量シタル減耗量百分ノ〇・一以上ナルトキ

ハ不良品トス

第四十八條

耐熱試験又ハ加熱試験ノ結果ハ警察官署ノ指示ニ從ヒ之ヲ帳簿ニ記載シ置クヘシ

第四十九條

無煙火藥、棉火藥又ハナイトログリセリン藥ハ硝化纖維素ヲ含有スル火藥ニシテ製造

後二年ヲ經過セサルモノハ毎年一回、製造後二年以上ヲ經過シ又ハ製造年月不明ノモノハ三月毎

ニ一回第四十六條ニ定ムル試験ヲ行フヘシ三月以内ニ於テ異狀ヲ認メタルトキ亦同シ

第四十九條ノ二

硝酸鹽、鹽素酸鹽又ハ過鹽素酸鹽ヲ主トスル爆藥ニシテ硝基化合物ヲ含有スルモノ

ノセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有スルモノヲ除クニ在リテハ製造後二年ヲ經過セサルモノハ毎年

一回、製造後二年以上ヲ經過シタルモノ若ハ製造年月不明ノモノハ六月毎ニ一回第四十六條ニ定

ムル試験ヲ行フヘシ六月内ニ於テ異狀ヲ認メタルトキ亦同シ

第四十九條ノ三

應府縣長官ハ前條火藥中種類ヲ限リ第四十七條ノ三第二項、第三項ノ方法ニ依リ

加熱試験ヲ行ハシムルコトヲ得

前項ノ試験中赤色瓦斯ヲ發生スルトキハ不良品トス

第四十九條ノ四

第四十七條ノ二、第四十九條ノ二及前條ニ依リ試験ヲ行フヘキ火藥

類ノ箱數ハ製造所及製造年月ヲ同クスル同種類ノ火藥類ニシテ製造後二年ヲ經過セサルモノニ在

リテハ外箱二十五箱端數ハ二十五ニ付、製造後二年以上ヲ經過シタルモノニ在リテハ外箱十箱

端數ハ十箱ニ切上ゲニ付各一箱以上、其ノ他ノモノニ在リテハ外箱ノ各箇トス

第五十條

一年間ニ於テ無煙火藥五千貫以上爆藥二千五百貫以上ヲ取扱フ者ハ何時ニテモ耐熱試験

又ハ加熱試験ヲ行フコトヲ得ヘキ準備ヲ爲スコトヲ要ス

第五十一條

耐熱試験又ハ加熱試験ノ施行ハ所轄警察官署ニ之ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ試験ニ關スル費用ハ申請者之ヲ負擔スヘシ

第五十二條

不良品タル火藥類ハ警察官署ノ指示ニ從ヒ硝酸鹽類ヲ主トスル有煙火藥ニ在リテハ水

中ニ放流シ其ノ他ノ火藥類ニ在リテハ屋外廣濶ナル場所ニ於テ風ヲ除ケ少量宛之ヲ燃燒スヘシ但

シ警察官署ノ認可ヲ受ケ膠質ニアラサルダイナマイト類ハ海岸ヲ距ルコト二十哩以上ノ海水中ニ

ダイナマイト以外ノ火藥類ハ海岸ヲ距ルコト十哩以上ノ海中又ハ他ニ危險若ハ損害ヲ及ボササル

適當ナル水中ニ之ヲ沈下スルコトヲ得

不良ノ程度極メテ輕微ナル火藥類ハ警察官署ニ於テ危險ノ虞ナシト認メタルトキハ期間ヲ指定シ

テ其ノ貯藏ヲ許可スルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ之ヲ良品ト隔離スルヲ要ス

第五十三條

火藥貯藏所危險ノ状態ト爲リ又ハ火藥類異狀ヲ呈シタルコトヲ發見シタル者ハ直ニ警

察官ニ之ヲ届出ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ火藥類貯藏所又ハ火藥類ノ所有者又ハ管理者ハ直ニ應急ノ措置ヲ行フヘシ

甲號
銃砲火藥類取締法
銃砲火藥類第十八條
銃砲火藥類第十七條
施行細則第十七條
用紙美濃半切

軍 用銃砲讓(渡)許可證	第 號	讓(渡)許可ヲ受ケタル者	種 類	數 量	讓(渡)ノ事由、 (受)目的	證書有効期間
(明治) 年 月 日		住所 氏 名				自(明治) 年 月 日 至(明治) 年 月 日

警察官署名(印)

乙號
銃砲火藥類取締法施行規則
第十六條第十七條第十八條
第二十二條銃砲火藥類取締
法施行細則第十七條
用紙美濃半切

火藥類讓渡許可(又ハ認可)證	第 號	讓渡許可(認可)ヲ受ケタル者	種 類	數 量	讓渡ノ事由、 目的	證書有効期間
(明治) 年 月 日		住所 氏 名				自(明治) 年 月 日 至(明治) 年 月 日

廳府縣(又ハ警察官署)名(印)

丙號
銃砲火藥類取締法
銃砲火藥類第十八條
銃砲火藥類第十七條
施行細則第十七條
用紙美濃半切

火藥類讓受許可證	第 號	讓受許可ヲ受ケタル者	種 類	數 量	讓受ノ事由、 目的	證書有効期間
(明治) 年 月 日		住所 氏 名				自(明治) 年 月 日 至(明治) 年 月 日

警察官署名(印)

丁號
銃砲火藥類取締法施行規則
第十六條第十七條第十八條
第二十二條銃砲火藥類取締
法施行細則第十七條
用紙美濃半切
折冊子

火藥類讓受許可證	第 號	讓受許可ヲ受ケタル者	種 類	數 量	讓受ノ事由、 期 間	證書有効期間
(明治) 年 月 日		住所 氏 名				自(明治) 年 月 日 至(明治) 年 月 日

廳府縣(又ハ警察官署)名(印)

(本許可證 表紙共 枚)

部		内	
種	類	讓渡人記入ノ欄	署名捺印
數	量	讓渡年月	

已號
銃砲火藥類取締法施行規則第三十九條銃砲火藥類取締法施行細則第十七條
用紙美濃半切

第 號	拳銃 又ハ短銃、仕込銃 仕込刀劍、其ノ他 變裝シタル武器 授受(又ハ運搬)許可證	(明治) 年 月 日	警察官署名(印)
授受(又ハ運搬)許可事由	授受(又ハ運搬)ノ許可ヲ受ケタル者	住所 氏 名	
數 量	種 類		

銃砲火藥類取締法施行細則

第 號	火藥類運搬許可證	(明治) 年 月 日	警察官署名(印)
戊 號	銃砲火藥類取締法施行規則第十六條銃砲火藥類取締法施行細則第十條		用紙美濃半切
運搬許可ヲ受ケタル者	住所 氏 名		
種 類			
數 量			
運搬ノ日時			
運搬ノ方法			
通 路			
發著ノ場所			

軍機保護法 (抜萃)

昭和十二年八月
法律第七十二號

改正 昭和十六年第五十八號

六六二

第八條 陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ軍事上ノ秘密保護ノ爲必要アルトキハ命令ヲ以テ左ニ掲グルモノ
ニ付測量、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得

一 軍港、要港又ハ防禦港

二 堡壘、砲臺、防備衛所其ノ他ノ國防ノ爲建設シタル防禦營造物

三 軍用艦船、軍用航空機若ハ兵器又ハ陸軍大臣若ハ海軍大臣所管ノ飛行場、電氣通信所、軍需
品工場、軍需品貯藏所其ノ他ノ軍事施設

前項ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條 陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ軍事上ノ秘密保護ノ爲必要アルトキハ命令ヲ以テ前條第一項ノ防
禦營造物又ハ軍事施設ノ周圍ノ地域ニシテ陸軍大臣又ハ海軍大臣所管ノモノニ付區域ヲ定メ其ノ
區域ニ付測量、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得
前項ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者亦前條第二項ニ同ジ

第十條 許可ヲ得ズ若ハ許可ニ附シタル條件ニ違反シ又ハ詐僞ノ方法ヲ以テ許可ヲ得テ第八條第一
項第二號若ハ第三號ニ掲グルモノニシテ同條ノ禁止若ハ制限ニ係ルモノ又ハ前條第一項ノ區域ニ
侵入シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 第八條第一項又ハ第九條第一項ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反スル行爲ヨリ生ジタル

圖書物件ヲ他人ニ交付シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ圖書物件ヲ公ニシ又ハ外國若ハ外國ノ爲ニ行動スル者ニ交付シタル者ハ十年以下ノ懲役又
ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ防空其ノ他國土防衛ノ爲軍事上ノ秘密保護ノ必要アルトキハ命
令ヲ以テ空域、土地又ハ水面ニ付區域ヲ定メ左ニ掲グル行爲ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得

一 其ノ區域ニ於ケル航空

二 其ノ区域内ノ氣象ノ觀測又ハ其ノ区域内ノ水陸ノ形狀若ハ施設物ノ狀況ノ測量若ハ空中、高
所ヨリノ撮影又ハ其ノ複寫若ハ複製

前項第一號ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處シ同項第二號ノ規定

ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第一項第二號ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反スル行爲ヨリ生ジタル圖書ヲ他人ニ交付シタル者
ハ五年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ圖書ヲ公ニシ又ハ外國若ハ外國ノ爲ニ行動スル者ニ交付シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ三
千圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（昭和十二年十月勅令第五百七十八號ヲ以テ同年十月十日ヨ
リ施行）

軍機保護法施行規則 (拔萃)

昭和十二年十月 陸軍省令第四十三號

改正 昭和十四年第五九號、一六年第六號

第二條 軍機保護法第八條第一項ノ規定ニ依リ左ニ掲グルモノニ付テハ測量、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ爲スコトヲ得ズ但シ第一號ニ掲グルモノニ付テハ當該要塞司令官(陸軍築城部本部長ノ管轄スル防禦營造物ニ付テハ陸軍築城部本部長)ノ、第二號ニ掲グルモノニ付テハ當該船舶又ハ軍事施設ヲ管轄スル部隊長ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

一 堡壘、砲臺其ノ他ノ國防ノ爲建設シタル陸軍防禦營造物
二 陸軍軍用船舶又ハ現場ニ標識ヲ設ケテ標示シタル陸軍大臣所管ノ飛行場、電氣通信所、軍需品工場、軍醫品貯藏所其ノ他ノ軍事施設

第三條 軍機保護法第九條ノ規定ニ依リ前條第一號ニ掲グル陸軍防禦營造物又ハ前條第二號ニ規定スル軍事施設ノ周圍ノ地域ニ付區域ヲ定メタルトキハ現場ニ標識ヲ設ケテ之ヲ標示ス
前項ノ區域ニ付テハ測量、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ爲スコトヲ得ズ但シ陸軍防禦營造物ノ周圍ノ區域ニ付テハ當該要塞司令官ノ、軍事施設ノ周圍ノ區域ニ付テハ當該軍事施設ヲ管轄スル部隊長ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 第二條又ハ前條第二項ニ規定スル行爲ノ許可ヲ受ケントスル者ハ左ノ様式ノ許可願書(三通)ヲ現住地又ハ當該行爲地最寄ノ憲兵分隊長(分遣隊長ヲ含ム以下之ニ同ジ)又ハ警察署長(臺灣ニ在リテハ郡守又ハ支廳長ヲ含ム以下之ニ同ジ)ヲ經テ當該要塞司令官(陸軍築城部本部長)又ハ當該部隊長ニ提出スベシ

測量(撮影、模寫、模造、錄取、複寫、複製)許可願

本籍(外國人ニ在リテハ國籍)
住所
職業
氏名

年齢

年月日

要塞司令官(陸軍築城部本部長)
軍司令官(陸軍技術本部長、陸軍航空本部長、陸軍師團長、陸軍科學研究所長、陸軍兵器本部長)
左記ノ通測量(撮影、模寫、模造、錄取、複寫、複製)致度軍機保護法施行規則第二(三)條ノ規定ニ依リ許可相成度候也

- 一 左記
- 二 區域(物件)
- 三 方法
- 四 使用器具類ノ名稱
- 五 日時(期間)
- 六 作業者ノ現住地、職業、氏名
- 七 作業ノ場所
- 八 員數
- 九 其ノ他參考ト爲ルベキ事項

軍機保護法施行規則

注意

- 一 用紙適宜
 - 二 目的ニ付テハ境界確定ノ爲等許可ヲ受クベキ行爲ノ目的ヲ記載スルモノトス
 - 三 區域(物件)ニ付テハ區域ハ何縣何郡何村字何全部又ハ何縣何郡何村字何ヨリ同村字何間一帶等其ノ地名、區間等ヲ、物件ハ模寫、模造スベキ何縣何郡何村字何一帶ノ寫眞、模型等其ノ物件ノ名稱等ヲ記載スルモノトス
 - 四 方法ニ付テハ平面測量、油繪等ノ方法ヲ記載スルモノトス
 - 五 使用器具類ノ名稱ニ付テハ何測量器、何寫眞機等ノ使用器具ヲ記載スルモノトス
 - 六 日時(期間)ニ付テハ何年何月何日午前十時頃又ハ何年何月何日ヨリ同月何日迄等日時又ハ期間ヲ記載スルモノトス
 - 七 作業者ノ現住地、職業、氏名ニ付テハ現ニ作業ニ從事セシムル者ノ現住地、職業、氏名ヲ記載スルモノトス
 - 八 作業ノ場所ニ付テハ何縣何郡何村字何何番地等測量、測量圖書ノ作成、撮影、現像、燒付、模寫、模造又ハ錄取スル場所ノ地名ヲ記載スルモノトス
 - 九 員數ニ付テハ測量ノ成果、寫眞原畫、複寫圖書等何部、何枚等其ノ員數ヲ記載スルモノトス
- 第七條** 第五條第二號乃至第四號ニ規定スル行爲ノ許可願ニ關シテハ第四條ノ規定ヲ準用ス但シ陸軍大臣ニ提出スル場合ニ在リテハ許可願書ハ四通トス

第十三條 第四條、第六條、第七條又ハ第九條ニ規定スル許可願書ハ縣、市、町、村其ノ他ノ公共團體及法人ニ在リテハ其ノ代表者ヨリ之ヲ提出スベシ

第十四條 削除

第十五條 第四條、第六條、第七條、第九條、第十一條及第十二條ノ規定ニ依リ許可又ハ承認ヲ受クル場合ニ於テ他ノ法令ノ定ムル所ニ依リ主務官廳ノ許可又ハ承認ヲ要スル行爲ニ付テハ先ヅ其ノ許可若ハ承認ヲ受ケ之ヲ證スル書類若ハ許可證、承認證ノ寫又ハ其ノ出願シタルコトヲ證スル書類ノ寫ヲ許可願書又ハ承認申請書ニ添付スベシ但シ昭和十二年海軍省令第二十八號軍機保護法施行規則ニ依リ許可又ハ承認ヲ要スル行爲ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十六條 第四條、第六條、第七條、第九條及第十一條乃至前條ノ規定ハ許可又ハ承認ヲ得タル事項ヲ變更セントスル場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 陸軍大臣、軍司令官、師團長、要塞司令官、陸軍築城部本部長、陸軍運輸部長又ハ部隊長許可若ハ承認ヲ爲シ又ハ條件ヲ附シテ許可若ハ承認ヲ爲シタルトキハ許可願書一通ヲ添附シタル許可證又ハ承認申請書一通ヲ添附シタル承認證ヲ交付ス但シ急速ヲ要スル場合ニ於テハ許可證又ハ承認證ヲ交付セザルコトアルベシ

第十九條 前條ノ許可證又ハ承認證ハ現場ニ於テ行爲ヲ爲ス者必ズ之ヲ携帯スベシ但シ第十條第二項但書ノ規定ニ依ル船主ヨリ陸軍大臣ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ
許可ヲ受ケタル行爲ノ場所二箇所以上ニ亘ル場合ニ於テハ各現場ニ於テ行爲ヲ爲ス者前條ノ許可證若ハ承認證又ハ此等ノ寫ヲ携帯スベシ

前二項ノ規定ニ依リ許可證若ハ承認證又ハ此等ノ寫ヲ携帯スル者ハ之ヲ何時ニテモ憲兵、衛戍服務ノ軍人、警察官吏及陸軍防禦營造物、陸軍々用船又ハ軍事施設當該部隊ノ職員ノ閱覽ニ供スベシ

第二十條 許可證ヲ失ヒタル場合ニ於テハ遲滞ナク其ノ事由ヲ具シ再下付ヲ申請スベシ

許可證ヲ失ヒタル者ハ直ニ最寄ノ憲兵分隊長又ハ警察署長ニ其ノ旨ヲ届出デ承認證ヲ受クルニ非ザレバ其ノ行爲ヲ繼續スルコトヲ得ズ

前項ノ届出ヲ受ケタル憲兵分隊長又ハ警察署長ハ其ノ旨許可證ヲ交付シタル官憲ニ報告又ハ通報スベシ

第二十五條 許可證又ハ其ノ寫ヲ所持スベキ者第十九條ノ規定ニ依ル閱覽ヲ拒ミタルトキハ十圓以下ノ科料ニ處ス

附則

本令ハ軍機保護法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

軍機保護法施行規則 (拔萃)

昭和十二年十月
海軍省令第二十八號

改正 昭和十四年第二〇號、第三八號
一五年第二二號、一六年第八號

第二條 軍機保護法第八條第一項ノ規定ニ依リ左ニ掲グルモノニ付テハ測量(船舶ノ運航ニ必要ナル測深、測距、方位測定等ヲ除ク以下同ジ)、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ爲

スコトヲ得ズ但シ第一號及第二號ニ掲グルモノニ付テハ當該鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ノ

第三號及第四號ニ掲グルモノニ付テハ海軍大臣、當該鎮守府司令長官、艦隊司令長官、獨立艦隊司令官又ハ要港部司令官ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

一 軍港、要港又ハ防禦港

二 砲臺、防備衛所其ノ他國防ノ爲建設シタル海軍防禦營造物

三 海軍ノ艦船、航空機又ハ兵器ニシテ左ニ記載シタルモノ

(省略)

四 現場ニ標識ヲ設ケテ標示シタル海軍大臣所管ノ飛行場、電氣通信所、軍需品工場、軍需品貯藏所其ノ他ノ軍事施設

第三條 軍機保護法第九條ノ規定ニ依リ前條第二號ニ掲グル海軍防禦營造物又ハ同條第四號ニ規定スル軍事施設ノ周圍ノ地域ニ付區域ヲ定メタルトキハ現場ニ標識ヲ設ケテ之ヲ標示ス

前項ノ區域ニ付テハ測量、撮影、模寫、模造若ハ錄取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ爲スコトヲ得ズ但シ海軍大臣、當該鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 第二條又ハ前條第二項ニ規定スル行爲ノ許可ヲ受ケントスル者(海軍大臣、當該鎮守府司令長官、艦隊司令長官、獨立艦隊司令官又ハ要港部司令官ニ於テ豫メ指定シテ許可シタル者ヲ除ク)ハ左ノ様式ノ許可申請書(二通)ニ作業責任者ノ寫眞ヲ貼付シ之ヲ現住地又ハ當該行爲地ノ最寄憲兵分隊長(分遣隊長ヲ含ム以下同ジ)又ハ警察署長(臺灣ニ在リテハ郡守又ハ支廳長ヲ含ム以下同ジ)ヲ經テ海軍大臣、當該鎮守府司令長官、艦隊司令長官、獨立艦隊司令官又ハ要港部

軍機保護法施行規則

司令官ニ提出スベシ但書(略)

様式(略)

第十四條 第四條、第六條、第七條、第九條、第十一條及第十二條ノ規定ニ依リ海軍大臣、鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ニ許可申請書又ハ承認申請書ヲ提出スル場合ニ於テ要塞地帯法、軍港要港規則又ハ防禦海面令ニ依リ海軍大臣、鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ノ許可又ハ承認ヲ受クルヲ要スルモノニ付テハ本令ノ規定スル書類ノミニ依ルコトヲ得

第十五條 第四條、第六條、第七條、第九條又ハ第十二條ノ規定ニ依リ許可又ハ承認ヲ受ケル場合ニ於テ他ノ法令ノ規定ニ依リ主務官廳ノ許可又ハ承認ヲ要スル行爲ニ付テハ先ヅ其ノ許可又ハ承認ヲ受ケ之ヲ證明スベキ書類又ハ許可書若ハ承認書ノ寫又ハ其ノ出願シタルコトヲ證スル書類ヲ許可申請書又ハ承認申請書ニ添附スベシ但シ昭和十二年陸軍省令第四十三號軍機保護法施行規則ニ依リ許可又ハ承認ヲ要スル行爲ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十六條 第四條、第六條、第七條、第九條及第十一條乃至前條ノ規定ハ許可又ハ承認ヲ受ケタル事項ヲ變更セントスル場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 海軍大臣、鎮守府司令長官、艦隊司令長官、獨立艦隊司令官、要港部司令官又ハ艦船部隊、官衙、學校ノ長許可若クハ承認ヲ爲シ又ハ條件ヲ付シテ許可若クハ承認ヲ爲シタルトキハ許可證又ハ承認證ヲ交付ス但急送ヲ要スルトキハ許可證又ハ承認證ヲ交付セサルコトアルベシ前項ノ許可證ハ許可申請書ヲ受理シタル憲兵分隊長又ハ警察署長ヲ經テ之ヲ交付ス

第十九條 前條ノ許可證又ハ承認證ハ現場ニ於テ行爲ヲ爲ス者必ズ之ヲ携帯シ其ノ附近ヲ警衛スル

海軍ノ軍人、軍屬若ハ憲兵又ハ警察官吏ノ要求アルトキハ何時ニテモ其ノ閱覽ニ供スベシ但書(略)

附則

本令ハ昭和十二年法律第七十二號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

要塞地帯法 (拔萃) 明治三十二年七月 法律第百五號

改正 大正四年第一七號 昭和一五年第九〇號

第二條 要塞地帯ノ幅員ハ防禦營造物ノ各突出部ヲ連結スル線ヲ基線トシ此ノ線ヨリ外方一定ノ距離以內ニ於テ之ヲ定ム

第三條 要塞地帯ハ陸地ト海面トヲ問ハス之ヲ三區ニ分チ各區ノ幅員ハ左ノ區別ニ從ヒ陸軍大臣之ヲ定メ並之ヲ告示ス其ノ之ヲ變更スル場合亦同シ但シ陸軍防禦營造物ノ地帯カ海軍防禦營造物ノ地帯ト相關聯スルカ或ハ軍港要港又ハ海軍用地ニ係ル場合並陸軍用地カ海軍防禦營造物ノ地帯ト相關聯スル場合ニ於テハ陸軍大臣海軍大臣協議ノ上之ヲ定メ連署シテ告示ヲ爲スコトヲ要ス

第一區 基線ヨリ測リ千メートル以內及基線ト防禦營造物間ノ區域

第二區 基線ヨリ測リ五千メートル以內

第三區 基線ヨリ測リ一萬五千メートル以內

第七條 何人ト雖要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ要塞地帯内水陸ノ形狀又ハ施設物ノ狀況ニ付

要塞地帯法

撮影、模寫、模造若クハ録取又ハ其ノ複寫若ハ複製ヲ爲スコトヲ得ス但シ軍機保護法ニ特別ノ規定アルモノニ付テハ其ノ規定ニ依ル

第九條 要塞地帯ノ第一區内ニ在リテハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ左ノ各號ノ一ニ該當スル行爲ヲ爲スコトヲ得ス

(各號略)

第十條 第二區内ニ在リテハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ水準標高四十メートル以上ノ高地ニ於ケル家屋、工場又ハ倉庫ノ新築、改築又ハ増築ヲ爲スコトヲ得ス

第十一條 第一區及第二區内ニ在リテハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ左ノ各號ノ一ニ該當スル行爲ヲ爲スコトヲ得ス

(各號略)

要塞地帯法施行規則 (抜萃)

明治三十三年六月
陸軍省令第十四號

改正 大正八年第二十八號
昭和十五年第四十六號

第一條 本令ハ陸軍防禦營造物ノ地帯ニ關聯セサル海軍防禦營造物ノ地帯ヲ除キ總テノ要塞地帯ニ之ヲ適用スルモノトス

第四條 要塞地帯法第七條、第九條乃至第十一條ニ規定スル行爲ノ許可ヲ受ケントスル者ハ許可願書(三通)ニ左ニ掲グル事項ヲ具シ現住地又ハ當該行爲地最寄ノ憲兵分隊長(分遣隊長ヲ含ム以

下同ジ)又ハ警察署長(臺灣ニ在リテハ郡守又ハ支廳長ヲ含ム以下之ニ同ジ)ヲ經テ之ヲ當該要塞司令官ニ提出スベシ

(左記略)

第七條 前三條ノ規定ニ依リ陸軍大臣又ハ要塞司令官ニ許可願書ヲ提出スル場合ニ於テ他ノ法令ノ定ムル處ニ依リ陸軍以外ノ主務官廳ノ許可ヲ要スル行爲ニ付テハ先ヅ其ノ許可ヲ受ケ之ヲ證スル書類若ハ許可書ノ寫又ハ其ノ出願シタルコトヲ證スル書類ヲ許可願書ニ添附スベシ

第八條 陸海軍以外ノ官廳ニ於テ要塞地帯法第七條及第九條乃至第十二條ニ規定スル行爲ノ承認ヲ受ケントスルトキハ第四條又ハ第五條ノ規定ニ準ジ承認申請書(三通)ヲ當該要塞司令官又ハ陸軍大臣ニ提出スベシ但シ陸軍大臣ニ提出スルモノニ在リテハ主務大臣ノ提出スルモノヲ除クノ外當該要塞司令官ヲ經由スベシ

前項ノ場合ニ於テハ憲兵分隊長又ハ警察署長ヲ經由スルヲ要セズ

第九條 第四條乃至前條ノ規定ハ許可又ハ承認ヲ得タル事項ヲ變更セントスル場合ニ之ヲ準用ス

第十條 憲兵分隊長又ハ警察署長第四條ノ規定若ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定又ハ第五條ノ規定若ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定ニ依リ許可願書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シ當該要塞司令官ニ提出スベシ但シ行爲地最寄ノ憲兵分隊長又ハ警察署長ハ許可願書一通ハ之ヲ保管スベシ

要塞司令官前項ノ規定ニ依リ第五條ノ規定又ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定ニ依ル許可願書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シ許可願書二通ヲ陸軍大臣ニ提出スベシ第八條第一項但書ノ規定ニ

要塞地帯法施行規則

依リ承認申請書ヲ受ケタルトキ亦同ジ

第十一條 陸軍大臣又ハ要塞司令官許可又ハ承認ヲ爲シタルトキハ許可願書一通ヲ添附シタル許可證又ハ承認申請書一通ヲ添附シタル承認證ヲ交付ス

第十二條 前條ノ許可證又ハ承認證ハ現場ニ於テ行爲ヲ爲ス者必ズ之ヲ携帶シ何時ニテモ當該要塞司令部職員、憲兵、衛戍服務ノ軍人又ハ警察官吏ノ要求ニ應ジ閱覽ニ供スベシ

要塞地帯法施行規則 (拔萃)

明治三十三年六月
海軍省令第十六號

改正 大正八年第二十號
昭和一五年第三十號

第一條 本令ハ海軍防禦營造物ノ地帯ニ之ヲ適用スルモノトス

第四條 要塞地帯法第七條、第九條乃至第十一條ニ規定スル行爲ノ許可ヲ受ケントスル者ハ許可申請書(三通)ニ左ニ掲グル事項ヲ具シ現住地又ハ當該行爲地最寄ノ憲兵分隊長(分遣隊長ヲ含ム以下之ニ同ジ)又ハ警察署長(臺灣ニ在リテハ郡守又ハ支廳長ヲ含ム以下之ニ同ジ)ヲ經テ之ヲ當該鎮守府司令官又ハ要港部司令官ニ提出スベシ

(左記略)

第七條 前三條ノ規定ニ依リ海軍大臣、鎮守府司令官又ハ要港部司令官ニ許可申請書ヲ提出スル場合ニ於テ他ノ法令ノ定ムル所ニ依リ海軍以外ノ主務官廳ノ許可ヲ要スル行爲ニ付テハ先ヅ其ノ

許可ヲ受ケ之ヲ證スル書類若ハ許可書ノ寫又ハ其ノ出願シタルコトヲ證スル書類ヲ許可申請書ニ添附スヘシ

第八條 海陸軍以外ノ官廳ニ於テ要塞地帯法第七條及第九條乃至第十二條ニ規定スル行爲ノ承認ヲ受ケントスルトキハ第四條又ハ第五條ノ規定ニ準ジ承認申請書(三通)ヲ當該鎮守府司令官若ハ要港部司令官又ハ海軍大臣ニ提出スベシ但シ海軍大臣ニ提出スルモノニ在リテハ主務大臣ノ提出スルモノヲ除クノ外當該鎮守府司令官又ハ要港部司令官ヲ經由スベシ

前項ノ場合ニ於テハ憲兵分隊長又ハ警察署長ヲ經由スルヲ要セズ

第九條 第四條乃至前條ノ規定ハ許可又ハ承認ヲ得タル事項ヲ變更セントスル場合ニ之ヲ準用ス

第十條 憲兵分隊長又ハ警察署長第四條ノ規定若ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定又ハ第五條ノ規定若ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定ニ依リ許可申請書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シ當該鎮守府司令官又ハ要港部司令官ニ提出スベシ但シ行爲地最寄ノ憲兵分隊長又ハ警察署長ハ許可申請書一通ハ之ヲ保管スベシ

鎮守府司令官又ハ要港部司令官前項ノ規定ニ依リ第五條ノ規定又ハ同條ノ規定ヲ準用シタル前條ノ規定ニ依リ許可申請書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シ許可申請書二通ヲ海軍大臣ニ提出スベシ

第八條第一項但書ノ規定ニ依リ承認申請書ヲ受ケタルトキ亦同ジ

第十一條 海軍大臣、鎮守府司令官又ハ要港部司令官許可又ハ承認ヲ爲シタルトキハ許可申請書一通ヲ添附シタル許可證又ハ承認申請書一通ヲ添附シタル承認證ヲ交付ス

第十二條 前條ノ許可證又ハ承認證ハ現場ニ於テ行爲ヲ爲ス者必ズ之ヲ携帶シ何時ニテモ其ノ附近

要塞地帯法施行規則

ヲ警衛スル海軍ノ軍人、軍屬、憲兵又ハ警察官吏ノ要求ニ應ジ閱覽ニ供スベシ

軍港要港ニ關スル件

明治二十三年一月
法律第二號

軍港要港境域内ニ所在ノ人民及出入スル船舶ハ海軍大臣定ムル所ノ軍港要港規則ニ從フヘシ但海軍大臣ニ於テ軍港要港規則ヲ定ムルトキハ内務大臣農商務大臣ト協議スヘシ

軍港要港規則 (拔萃)

明治三十三年四月
海軍省令第七號

改正 昭和一四年第三四號

第十九條 鎮守府司令長官ノ許可ヲ得スシテ軍港要港境域内ヲ航空シ又ハ同境域内水陸ノ形狀ヲ測量、撮影、模寫、錄取シ若ハ地理案内等ノ圖書ヲ發行スルヲ禁ス但シ艦船運航ノ際行船ニ必要ナル錘測ハ此ノ限ニ在ラス

附則

第二十八條 本則ハ明治三十三年五月二十日ヨリ施行ス

鑛業特設電話規則

明治三十八年十二月
逓信省令第八十四號

改正 昭和一二年第八十號

第一條 逓信大臣ハ必要ト認ムル地方ニ於テ鑛業者ノ申請ニ依リ同一人若ハ同一組合ノ經營ニ係ル

鑛業及其ノ直接附帶事業ノ専用ニ供スル爲鑛業特設電話ヲ施設ス

第二條 鑛業特設電話ヲ専用スル鑛業者 以下單ニ專ハ逓信省ノ指示スル所ニ從ヒ其ノ電話ニ要スル機械、線路其ノ他一切ノ物件ヲ供給シ且其ノ設備及維持ヲ負擔スヘシ

第三條 第一條ノ申請ヲ爲サムトスル者ハ逓信大臣ニ左ノ事項ヲ記載シタル書類ヲ提出スベシ
一 専用ヲ必要トスル事由及地域 鑛業及附帶事業ノ種類、其ノ經營作業方法等並専用ノ區域
二 電話機設置ノ場所 所在道府縣郡市町村名 及電話機ノ箇數 各設置場所毎
前項ノ申請書ニハ左ノ書類及圖面ヲ添附スヘシ

- 一 工事設計書 機械ノ種類、保安裝置、線條ノ種類、太サ、線路ノ種別及互長、回線ノ方式等ヲ記載スヘシ
- 二 電話線路圖 線路及機械設置場所他ノ電信電話線、電燈線、電力線等ノ位置、道府縣郡市町村等ノ境界線ヲ記載スヘシ
- 三 電話回線圖 交換機、電話機、轉換機ノ位置ヲモ記載スヘシ

第四條 左記各號ノ場合ニ於テハ關係ノ書類及圖面(第二號ノ場)ヲ具シ逓信大臣ニ申請スヘシ
一 専用ヲ必要トスル事由又ハ地域ヲ變更セムトスルトキ

- 二 全部ノ専用ヲ廢止セムトスルトキ
- 左記各號ノ場合ニ於テハ關係ノ書類及圖面ヲ具シ施設地ヲ管轄スル逓信局長ニ申請スヘシ
- 一 鑛業直接附帶事業用電話機ヲ新設移轉シ又ハ其ノ設置場所ノ名稱性質ヲ變更セムトスルトキ
 - 二 鑛業用電話機ヲ其ノ直接附帶事業用ニ變更セムトスルトキ
- 左記各號ノ場合ニ於テハ遲滞ナク關係書類及圖面ヲ具シ施設地ヲ管轄スル逓信局長ニ届出ツヘシ

鑛業特設電話規則

但シ左記第一號ノ場合ニ於テハ通話開通年月日、設置場所及箇數ヲ記載シタル書類ヲ添附スヘシ

- 一 鑛業用電話機ヲ増加シタルトキ
- 二 鑛業用電話機設置場所ヲ移轉シ又ハ其ノ名稱性質ヲ變更シタルトキ
- 三 鑛業用又ハ其ノ直接附帶事業用電話機ノ使用ヲ廢止シタルトキ
- 四 前各號ノ場合ヲ除クノ外前條第二項各號ノ事項ヲ變更シタルトキ

第五條 鑛業特設電話ヲ専用スル鑛業及其ノ直接附帶事業ノ全部ヲ繼承シタル者ハ其ノ電話ノ専用ヲ繼承スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ當事者連署ノ上遞信大臣ニ届出ツヘシ

第六條 専用者ハ電話機、箇毎ニ通貨ヲ以テ電話専用料月額金五十錢ヲ所轄遞信局ニ納ムヘシ

第七條 電話専用料ハ左ノ各期ノ初月一日ヨリ十日マデニ其ノ間ニ屬スル分ヲ納ムヘシ

第一期 四月ヨリ六月マテ

第二期 七月ヨリ九月マテ

第三期 十月ヨリ十二月マテ

第四期 一月ヨリ三月マテ

電話開通初期ノ電話専用料ハ開通ノ月ヨリ其ノ期ノ末月ニ至ル分ヲ開通ノ日ヨリ十五日以内ニ納ムヘシ月ノ中途ニ於テ電話ヲ開通シタルトキト雖開通ノ月ニ屬スル電話専用料ハ一箇月分トシテ計算ス

一期ノ中途ニ於テ電話機ノ使用ヲ廢止シタルトキト雖其ノ期內ニ屬スル電話専用料ノ全額ヲ徵收ス

第八條 専用者ハ左記各號ノ場合ヲ除クノ外鑛業特設電話ヲ専用スル鑛業及其ノ直接附帶事業ノ爲明治三十三年九月遞信省令第四十八號私設電信規則ニ依ル電信電話ヲ施設スルコトヲ得ス

一 遞信大臣ニ於テ私設電信電話ニ依リ公衆通信ヲ取扱ハシムルノ必要ヲ認メタルトキ

二 電氣事業ノ用ニ供スル電信電話ニシテ遞信大臣ニ於テ鑛業特設電話トシテ施設スルヲ不適當ナリト認メタルトキ

前項第一號ニ該當スル私設電信電話ハ之ヲ鑛業特設電話ニ連接セシムルコトアルヘシ

第九條 専用者本規則ニ違背シ又ハ主務官署ノ命令ヲ遵守セサルトキハ電話ノ専用ヲ禁止又ハ停止スルコトアルヘシ

第十條 電話規則第二十八條、第二十九條、第七十六條、第八十四條乃至第八十八條及第九十三條ノ規定ハ之ヲ鑛業特設電話ニ準用ス

第十一條 遞信大臣ハ必要ト認ムルトキハ鑛業特設電話ノ全部若ハ一部ヲ停止又ハ廢止スルコトアルヘシ

第十二條 専用者會社ナルトキハ其ノ代表者又組合ナルトキハ其ノ總代人ヲ遞信大臣ニ届出ツヘシ

第十三條 本規則ニ依リ提出スル申請書又ハ届書ハ電話施設地ヲ管轄スル遞信局ヲ經由スヘシ

第十四條 本規則ハ官廳ノ經營ニ係ル鑛業ニモ之ヲ準用ス

陸軍輸送港域軍事取締法 (拔萃)

昭和八年三月
法律第二十九號

改正 昭和十五年第九十一號

第一條 本法ニ於テ陸軍輸送港域トハ左ニ掲グル區域ニシテ命令ヲ以テ指定スルモノヲ謂フ

一 廣島縣廣島市、同縣安藝郡海田市町、矢野町、船越町、府中町、奥海田村、溫品村、戸坂村、畑賀村、中野村、坂村及中山村、同縣安佐郡祇園町、福木村、山本村及長束村、同縣佐伯郡廿日市町、嚴島町、五日市町、地御前村、原村、宮内村、井口村、石内村、河内村、八幡村、觀音村、平良村、大野村、玖嶋村及砂谷村並ニ其ノ附近ノ水面

一 佐賀縣東松浦郡切木村及入野村、同縣西松浦郡伊萬里町、山代町、黒川村、波多津村、大坪村、大川内村、二里村及東山代村、長崎縣北松浦郡志佐町、今福町、星鹿村、調川村、福島村、鷹嶋村、上志佐村及御厨村並ニ其ノ附近ノ水面

(以下略)

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和八年五月勅令第一〇九號ヲ以テ同年同月二十日ヨリ施行)

本法施行ノ際現ニ作業中ノモノニハ第三條第一號乃至第三號及第四條第一項第一號ノ規定ヲ適用セズ

附則 (昭和十五年四月法律第九一號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和十五年六月勅令第三九五號ヲ以テ同年同月十日ヨリ施行)

本法ニ依リ新ニ許可ヲ受クルコトヲ要スルコトト爲リタル事項ニシテ本法施行ノ際現ニ存スルモノニ關シ本法施行ノ際必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

陸軍輸送港域軍事取締法施行規則

昭和十五年六月
陸軍省令第十八號

第一條 陸軍輸送港域ハ之ヲ別圖實線以內トシ同港域第一區ヲ點線以內、同港域第二區ヲ點線以外實線以內トス

前項ノ各區域ハ現場ニ標識ヲ設ケ之ヲ標示スルノ外關係人ノ閱覽ニ供スル爲其ノ圖面ヲ當該區域ヲ管轄スル市役所、町村役場、警察署又ハ憲兵隊ニ備付ク
(以下略)

鑛山監督局管轄區域表

名 稱	位 置	管 轄 區 域
東京鑛山監督局	東京府東京市	東京府、神奈川縣、新潟縣、埼玉縣、群馬縣、千葉縣、茨城縣、栃木縣、愛知縣、靜岡縣、山梨縣、岐阜縣
鑛山監督局管轄區域表		六八一

仙臺鑛山監督局
大阪鑛山監督局

宮城縣仙臺市
大阪府大阪市

福岡鑛山監督局

福岡縣福岡市

札幌鑛山監督局

北海道札幌市

備考

鑛業若ハ砂鑛業ノ區域カ二以上ノ鑛山監督局ノ管轄區域ニ跨ルトキ又ハ鑛山監督局ノ管轄區域ノ境界明確ナラサル爲管轄ニ付疑ヲ生シタルトキハ商工大臣管轄鑛山監督局ヲ指定ス

長野縣

宮城縣、福島縣、岩手縣、青森縣、山形縣、秋田縣
京都府、大阪府、兵庫縣、奈良縣、三重縣、滋賀縣
福井縣、石川縣、富山縣、鳥取縣、島根縣、岡山縣
廣島縣、和歌山縣、德島縣、香川縣、愛媛縣、高知縣
長崎縣、山口縣、福岡縣、大分縣、佐賀縣、熊本縣
宮崎縣、鹿兒島縣、沖繩縣
北海道

昭和十六年八月二十日印刷
昭和十六年八月二十五日發行

發行人

東京市京橋區木挽町八丁目十四番地
社団法人 日本鑛山協會

代表 鷹
大庭 千

印刷人

東京市京橋區新富町一丁目七番地
石井 精一郎

印刷所

東京市京橋區新富町一丁目七番地
安信 舍印刷所
電話築地(55)二二四九四

918
97

終